

# 第15回 年次大会の報告

シンポジウム録  
分科会発表報告書  
2022年度総会報告

## 『コミ福25周年 —「いのちの尊厳」の視点でふりかえり、今後を展望する—』

- 【シンポジスト】 湯澤 直美 (2022年度まなびあい運営委員長／  
コミュニティ福祉学部長／福祉学科教員)  
浅井 春夫 (名誉教授／元福祉学科教員)  
鈴木 弥生 (コミュニティ政策学科教員)  
沼澤 秀雄 (スポーツウエルネス学科教員)
- 【司会】 跡部 千慧 (2022年度まなびあい運営委員／  
コミュニティ政策学科教員)

**司会 (跡部)** 本日は、まなびあいのシンポジウムにお集まりいただきましてありがとうございます。2017 (平成29) 年のまなびあいの大会において、コミ福20周年のシンポジウムを開催してから5年が経ちました。今年はコミ福創設25周年という節目の年でもあり、来年度からスポーツウエルネス学部が誕生し、コミュニティ福祉学部は新体制に移行していく門出の年でもあります。こうした状況を踏まえて、本日のまなびあいでは、コミ福25周年をふりかえるシンポジウムを開催いたします。

それでは、改めまして、本日のシンポジストの先生方をご紹介いたします。本日は4人の先生に話題提供していただきながら、今後のコミ福を展望してまいります。参加者のみなさまとも、これまでのコミ福や今後の展望について、さまざまな観点から話していけたらと思っています。

最初にご登壇いただく湯澤直美先生は、現在の学部長でいらっしゃる、コミ福の設立時からコミュニティ福祉学部の教員をなさっていらっしゃいます。本日は、コミュニティ福祉学部開設前後の具体的なエピソードを交えて、これからのコミュニティ福祉学部を考える話題を提供していただく予定になっております。

**湯澤** よろしくお願ひします。

**跡部** ありがとうございます。2人目にご登壇いただく、浅井春夫先生は現在名誉教授でいらっしゃいますが、学部長なども歴任され、本日は「いのちの尊厳」の対極にある戦争を取り上げていただく予定になっております。

浅井 よろしくお願ひします。

**跡部** 本年のシンポジウムを考える上で、やはり、コミュニティ福祉学部の理念である「いのちの尊厳」、その対極にある戦争がこの21世紀において起こったという点には触れざるを得ません。ロシアによるウクライナ侵攻が続いているため、本日は、戦争をテーマに研究されてきた浅井先生にお越しいただいております。

また、ロシアのウクライナ侵攻によって、エネルギーや材料費の高騰等、グローバルな規模でさまざまな問題が絡み合っていることも、今年は直面せざるを得なかった年でした。このような、グローバル規模の問題が複雑に絡まり合う中で「いのちの尊厳」にどのように向き合っていくのかを、立教大学のなかで英語を使った講義を展開され、コミュニティ福祉学部においてグローバルな問題を扱うことをけん引されてきた鈴木弥生先生に語っていただきます。

鈴木 よろしくお願ひいたします。

**跡部** そして最後に、沼澤先生には、なぜスポーツウエルネス学科がコミュニティ福祉学部で誕生したのかを中心に、コミュニティ福祉学部でのスポーツウエルネスの教育、研究の成果をお話いただき、そして、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の卒業生と、現役のスポーツウエルネス学科生に向けてのメッセージをいただきます。

沼澤 よろしくお願ひします。

**跡部** ありがとうございます。それでは、本題に入ります前に、2017年のまなびあいで開催された「コミ福創設20周年をふりかえる」シンポジウムの概要を共有していきたいと思ひます。本日は2017年のシンポジウムの蓄積の上に立ちながら、この5年間の変化を踏まえた議論を進めてまいります。2017年当時、コミ福にいなかった私がやるのも大変恐縮ではあるのですが、新しい世代に引き継いでいくという意味で、2017年のシンポジウム録（関ほか2018）をもとに、コミ福創設20周年を駆け足でふりかえっていただければと思ひます。

**跡部** 略歴（図1）は、みなさまご存じの通りかなと思ひますが、コミュニティ福祉学部は、1998（平成10）年に、コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科という1学科体制で始まりました。その後、大学院の修士課程、博士課程が創設され、2006（平成18）年にはコミュニティ政策学科との2学科体制。そして2008（平成20）年からスポーツウエルネス学科との3学科体制へと移っていき、3学科

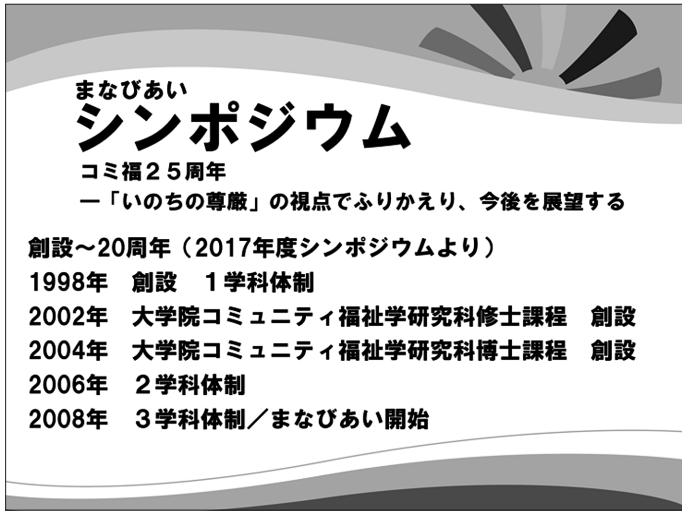


図1 コミュニティ福祉学部の略歴  
出典：当日の投影資料

体制になった2008年にまなびあいも開始されたという経緯になっております。

**跡部** 2017年度のシンポジウム録を読んでいると、とても生き生きとした開設当初の話であったり、これまでのお話がいっぱい詰まっています、こんな歴史を歩んできたのだということが鮮明にわかるのですが、ここでは、20年の軌跡をピックアップしてご紹介できればと思います。

立教大学コミュニティ福祉学部は、東京六大学初の福祉系学部として創設されました。当時の新座キャンパスは図書館と研究棟があるくらいで、野球場が大きく場所を占めているという場所だったそうです。そして印象的なのが、基礎演習が福祉分野の先生と、他分野の先生との2名体制をとり、通年で1年間かけて20名のクラスを担当したということです。本日も登壇いただく沼澤先生と湯澤先生も一緒に基礎演習を担当されていたということは、非常に興味深いなと思って拝読しておりました。

**跡部** 当時のコミュニティ福祉学部には、割と「みんなで決める」という雰囲気があったり、学部研修旅行に行ったりという教員サイドの話もあったりですとか、32名程度の専任教員ということで、福祉だけではなく、さまざまな分野の先生方が集まってきて、その中で学部理念である「いのちの尊厳のために」が生まれてきた。

この学部理念「いのちの尊厳のために」は、福祉の先生がいるだけでは生まれなかった理念であり、キリスト教学等の他分野の先生がいらっしゃる中で生まれてきたんだというエピソードや、学部の理念がもつ意味についても、シンポジウム録には、詳しく書かれていますので、まだお読みでない方は、2017年シンポジウム録もご覧いただけたらと思います。

また、大学院設置時の苦労話、立教大学において10年ぶりの新学部となったコミ福が創設されて以来、立教大学においては新学部創設が相次ぎ、大学再編の中で、さまざまなかたちで、創設当時コミ福にいらした先生方が、他学部へ転籍されたお話や、コミュニティ政策学科の教員体制が1998年の創設から2013（平成25）年という15年をかけてようやく整えられてきたというお話も、2017年のシンポジウム録には収録されておりました（関ほか2018）。

**跡部** そして2017年当時の3学科の特徴を最後にご紹介したいと思います。福祉学科は、やはり、実習がひとつの肝になっていて、実習の受講生が100人を超えてきた。コミュニティ政策学科はインターンシップという、ひとつの看板授業があり、コミュニティ福祉学部のグローバル教育の中心となって取り組んできた。そして、スポーツウエルネス学科はスポーツだけではなく、ウエルネスを学ぶ学科として他大学にない独自性を発揮し、スポーツに関わる卒業生も出てくるし、プロスポーツ選手も輩出してきてだけでなく、これは3学科すべてに共通することですが、卒業生それぞれの仕事の中には、コミュニティ福祉学部の精神が根底にあるということが、2017年のシンポジウムで話されていました（関ほか2018）。

**跡部** それでは、2017年の議論を踏まえて、本日の25周年をふりかえるシンポジウムに入っていきたいと思います。最初に、湯澤先生からコミュニティ福祉学部の創設前後のことを具体的にエピソードも交えてお話しいただき、前回の2017年のシンポジウムから5年たった現在に立って、今後のコミュニティ学部を考える話題提供をしていただきます。それでは、湯澤先生、よろしくお願いいたします。

**湯澤** 跡部先生、丁寧に説明いただき、ありがとうございました。大変助かりました。それでは、1人15分でお時間をいただいていますので、時間を守るようにがんばりたいと思います。私の報告は、少々大きなタイトルをつけてしまっています。学部開設から25年が経過し、更に新しいステージを踏みだすこの時期に、原点としてどのようなことがあったのだろうかという点を、最初に、みなさまに話題提供ができればと思っています。

本日は、おもに2つの柱を立てています。いま、跡部先生から学部創設からの経緯をお話しいただきましたが、実はもう少しその前のお話もしてみたい、と思っ

ています。つまり、鶏さんが卵を産んで、そこからコミュニティ福祉学部が誕生したとしたら、鶏さんはどんなものだったのだろうかということが1つ目の柱のお話です。

それから、2つ目は、身近なところから私が体験させていただいたことについてです。私は1998年からコミュニティ福祉学部に通っているのですけれども、本当に、いろいろな意味で先生方、あるいは学生さん、職員のみなさんに育てていただいたな、と実感しております。まだまだ成長していかなければならない存在ではあるのですけれども、感謝の気持ちも込めて、体験談をお話しできればと思っています。

湯澤 では、1つ目の「鶏の話」から始めます。スライドに示したのは、社会学部のホームページから、同学部の歴史を示した図です（図2）。

1947年	文学部に社会科設置
1949年	社会学科と改称
1954年	大学院に応用社会学専攻設置
1958年	社会学部社会学科開設
1964年	社会学科から産業関係課程が独立し、産業関係学科設置 社会学部は二学科体制になる
1967年	産業関係学科からホテル・観光コースが独立、 観光学科設置 社会学部は三学科体制となる
1990年	大学院に社会学専攻修士課程設置
1997年	大学院に社会学専攻博士課程設置

図2 社会学部の変遷

出典：当日の配布資料・投影資料

社会学部ホームページ「社会学部の歩み」より一部転載

<https://sociology.rikkyo.ac.jp/undergraduate/about/history.html>（2023年8月30日最終閲覧）

湯澤 実は、コミュニティ福祉学部の「鶏」は、社会学部の話になるのです。まず、1954（昭和29）年の欄をみますと、立教大学大学院に「応用社会学専攻」が設置されています。その後、1960年には応用社会学研究科が開設され、そこに社会福祉コースというものがございました。

そして次は、学部の話になるのですが、1958（昭和33）年に社会学部社会学科

が、1学部1学科という設立当初のコミュニティ福祉学部と同じ体制で設立されています。その内容はどのようなものであったのでしょうか。図3をご覧ください。こちらは、日本社会福祉学会の学会誌である『社会福祉学』から転載したものです。J-STAGEというサイトで、『社会福祉学』のなかから「立教大学」というワードで検索をかけてみました。そうしたところ、掲載されているものうち、最も古い年次のものが、『社会福祉学』11巻に所収の早坂泰次郎先生の論稿「立教大学大学院応用社会学研究科社会福祉コース（大学院紹介）」でした。この論稿により、社会学科のなかにはコースがあり、社会学、労務管理、新聞広報、そして社会福祉のコースがあったということがわかります。ただ、これは学内限りの措置であって、1960年代末にはいったんこのコースは廃止になっているということでした。

この早坂先生の論考には、このような1971（昭和46）年当時の社会学部の開講科目が載せられています。ご覧いただくとわかりますように、立教大学における社会福祉教育は「実に長い歴史があった」ということを感じさせられるような科目群が載せられています（図3）。

学 部	はじめにまず本年度履修要項の中から社会福祉関係の科目を紹介しておく。	グループワーク実習	早坂泰次郎教	
	社会福祉概論		岩井祐彦教授	
	社会福祉概論	横山遼講師	社会問題	副田義也講師
	社会福祉の方法(1) ワールド・ケイ	社会福祉の方法(2) ワールド・ケイ	医学知識	江口篤博講師
	社会福祉の方法(3) コミュニティ・オーガニゼーション	社会福祉の方法(4) コミュニティ・オーガニゼーション	病院管理論	落合太郎講師
	社会福祉の特講(1) 児童 橋本達彦講師	社会福祉の特講(2) 家庭 河合 洋講師	青少年行政	平尾 靖講師
	社会福祉の特講(3)	本年春開講せず	カウンセリング	平木典子講師
	社会福祉実習	本年春開講せず	バーンリアイ論	平木典子講師
	河合 洋講師	岩井祐彦教授	精神衛生	河合 洋講師
	鶴沢立枝講師	岩井祐彦教授	実存心理学	早坂泰次郎教
		岩井祐彦教授	発達心理学	中島 力教授
		岩井祐彦教授	臨床心理学	森脇 聖教授
		岩井祐彦教授	演習(1) 日本人の精神構造	岩井祐彦教授
		岩井祐彦教授	演習(2) 家族の臨床的研究	岩井祐彦教授
		岩井祐彦教授	演習(3) Children & Adults in Intactuation in Social Science	早坂泰次郎教
	岩井祐彦教授	演習(4) 人間関係の視察学	早坂泰次郎教	
	岩井祐彦教授		早坂泰次郎教	
	岩井祐彦教授		早坂泰次郎教	
	岩井祐彦教授		早坂泰次郎教	
	岩井祐彦教授		早坂泰次郎教	
	岩井祐彦教授		早坂泰次郎教	

出典：日本社会福祉学会『社会福祉学』11巻：1971年

図3 1971年当時の社会学部の開講科目

出典：当日の配布資料・投影資料

論文：早坂泰次郎（1971）「立教大学大学院応用社会学研究科社会福祉コース（大学院紹介）」『社会福祉学』11巻より一部転載

湯澤 これと同じくらい重要なエピソードが、立教大学の社会福祉研究所の誕生です。この研究所は、1967（昭和42）年に設立されており、1960年代より、立教大学のなかに、既に社会福祉をテーマとした研究所が設立されていたわけですね。

社会福祉研究所は、立教大学の建学の精神、ならびに、キリスト教に基づく教育を具体的実現する拠点として設立されています。一人一人の幸福の実現に寄与する活動を広く展開するというので、まさに、コミュニティ福祉学部が誕生したときの原点と同様の視点が社会福祉研究所の設立時の理念にございました。

同時に家庭福祉相談室が同年（1967年）に開設されているのです。当初は部屋がなく学生相談所を土曜日に借りていたという状態でもありましたが、このような相談室の活動も1960年代当時からあったということでございます。

**湯澤** さて、ここから少し話が飛びます。社会福祉研究所が1990年代以降に大きく転換する時期を迎えます。まず、佐藤悦子先生が1988（昭和63）年に福祉研究所の所長に就任されました。その2年後の1990（平成2）年に庄司洋子先生が赴任なさいます。このときに、佐藤悦子先生が、当時の社会福祉分野の政策動向を反映して拡大しつつあった各大学の福祉教育の取り組みを強く意識されて、立教大学社会福祉研究所も、こうした時代状況にふさわしいものにしたいという意欲を表明されたそうです。そして、心理臨床が専門の佐藤悦子先生が、庄司洋子先生にこうおっしゃったそうです。「私は福祉の臨床分野を受け持つから、あなたが福祉の選択分野を担当して、新しい福祉研をつくりましょう」と。

おふたりは、そこから社会事業学校連盟の会議にも参加し、そして、ついに、カリキュラム改革も始めているのです。これは、庄司洋子先生が「社会福祉士の養成のカリキュラムを置きましょう」とおっしゃって、どんどん進めたとお聞きしています。

その結果、1993（平成5）年に立教大学社会学部社会学科で社会福祉士養成教育が始まっているのですね。これがコミュニティ福祉学部の「鶏」にあたる部分になります。私も当時、この事業の一部にゲストスピーカーとして参加させていただく中で、先生方のすごく熱い教育姿勢を目の当たりにした経験があります。また、私は、当時、立教大学大学院社会学研究科に進学をしており、庄司洋子先生が主査、佐藤悦子先生と木下康仁先生が副査ということで、大変お世話になっています。

**湯澤** さて、更にみていきましょう。1994（平成6）年の社会福祉研究所のニュースには、福山清蔵先生が登場します。福山先生は、後にコミュニティ福祉学部開設準備室でご尽力いただいた先生です。そして、塚田総長時代に、法学部の五十嵐暁雄先生と文学部の福山先生と一緒に話しながら、そして関正勝先生、高橋紘士先生、三本松政之先生などをお迎えしながら、さきほどの話にありましたように東京六大学で初めての福祉系学部であるコミュニティ福祉学部が1998年に開設されたということになります。実に多様な領域の教員の陣容——社会福祉学10



名・キリスト教学4名・臨床心理学4名・スポーツ健康科学10名・言語4名——でありました。

湯澤 コミュニティ福祉学部開設の初年度（1998年）は、190人定員のところ300名以上が入学なさって、実習先確保をどうしよう！と嬉しい悲鳴だったことを、昨日のここのように覚えています。さて、学部長室には、学部設立に関わる分厚い資料が置いてあるのですけれども、なかなかみなさんと資料を見る機会はありません。そこで、コミ福の誕生について、提出書類にはどんなふう書かれていたのだろうかということを、ご紹介してみようと思います。

このパワーポイントにある写真は、設置認可申請に関わる提出書類です。文部科学省に「社会福祉学」分野の学部として申請したわけですが、ここでは、次のように、書かれておりました。

本学部は、「人間の尊厳のために」という基本理念に立ち、建学以来125年にわたる長期基盤と研究を踏まえて新しい福祉社会の実現が期待される今日、コミュニティにおける福祉の実践的基盤を開き、福祉実現を軸としたコミュニティの在り方を探求する教育と研究に取り組むために設置する。

さきほど、ご紹介した社会福祉教育の実績を踏まえて進化していくのだ、ということが書かれています。そして、コミュニティ福祉学部は、福祉の実現を、これは、いまのコミュニティ政策学科の取り組みに通ずるところなのですが、「市民社会の側から目指す」ということで、コミュニティを位置づけているのですね。そして、この位置づけを尊重した共生の在り方としてのコミュニティに基礎を置く、新しい意味での福祉学部の構築。いわば、「人間についての総合学であり、学際的な研究を必要としているのだ」という前提に立って設立されました。

湯澤 もう残り少ない時間になってしまいました。そこで、次に、私が思い出すいくつかのエピソードをご紹介したいと思います。このパワーポイントに掲載した著作は、『生のリアリティーと福祉教育』というタイトルをつけて、本学部で出版したものです。分野を超えて、学部の各教員が自分自身の授業の中身を共有していこう、という趣旨で編まれた本になります。第3章「障害を持つ当事者教員は学生にどのように関わったか」という章は、安積遊歩さんが書いてくださった論稿です。安積遊歩さんは生まれつき骨が弱い特徴を持っていらして、アメリカのバークレー自立生活センターで研修を受けて、ピア・カウンセリングを日本に紹介をするとともに、優生思想の撤廃や、自立生活運動をはじめ、貴重な発信を続けた方です。重度の障がいをおもちなので授業も車椅子が欠かせないのです

が、当時は車椅子から降りて教壇の上に乗って、本当に真剣な授業を展開していただきました。

この章の中に書かれているひとつの言葉を紹介したいのですが、その前段として、安積遊歩さんは、最初の授業で、必ず、女性性器を切除する問題を扱った『戦士の刻印』というドキュメンタリー映画を見てもらうことから始めたそうなのです（安積 2009: 73）。この映画は、片目を兄の空気銃の発砲によって失ったアリス・ウォーカーによってつくられているのですが、この映画で取り上げられているのは、女性性器が切除されるという本当に恐ろしい悪習ですね。20歳ぐらいまでの、しかも、女の子だけがそういうことに遭うと。

安積遊歩さんは、この映画には、人がよりよく生きるための自由や生命力を奪い続ける、とんでもない差別の実態が描かれているとおっしゃいます。そして、コミュニティ福祉学部の授業の最初で受講生とこの映画をみるのには、次のような福祉の考え方があからなのだそうです。

すなわち、「福祉はよりよく生きることや一人一人の生命力を徹底的に応援することなんだ」（安積 2009: 74）とおっしゃいます。けれども、「応援する以前の問題が世界にある。つまり、それはさまざまな差別や抑圧だ」（安積 2009: 74）。現代においてもなお、戦争や紛争が絶えまなく続き、ロシアのウクライナ侵攻などが、日常的にテレビで放送されるような現実がありますね。安積遊歩さんは、「そうした差別や抑圧の実態を認識し、闘っている人たちにつながっていくことが、まず福祉であるべきだ」（安積 2009: 74）と書かれておられます。この認識は、まさに、私たちが大きく学び、また、その後、教育の中でつないでいこうとしたところに重なります。

**湯澤** 次にご紹介したいのは、60代でお亡くなりになってしまった尾崎新先生です。尾崎先生は本当に、私たち若い年下の教員を育ててくださいました。そのひとつの方法は、尾崎先生の授業を私たちに公開してくれたということです。私はまだまだ「ひよっこ」で、本当に右も左も分からないときに尾崎先生の授業に全部出させていただきました。さらに、授業の後に、ため息ついて、「今日もこれでよかったのか」、「こうすればよかったかな」と頭をもたげながら思考する尾崎先生の姿まで見せていただきました。こういう教員同士のつながりによって心底支えられてきたと、いまも感じています。

**湯澤** それから、やはり忘れられないのは、教授会での討議です。昨今は教授会の議題がいっぱいで、なかなか自由な討議ができる時間がないのですけれども、あのときの教授会は、いまでも本当に鮮やかに覚えています。聖書学で著名な宗教学領域で赴任してくださった佐藤研先生が、「人間の尊厳のために」と学部理念

に掲げていていいのだろうか、問題提起をなさったわけです。人間もその一部である「いのち」。ここには自然の命ということもあるわけですが、その全体の尊厳、可能性を思考して、そこから人間固有の尊厳を新しく位置づけられるのではないかという提起を、佐藤研先生がなさいました。この提起を受けて、コミュニティ福祉学部は、学部理念を「人間の尊厳のために」から「いのちの尊厳のために」に転換いたしました。この経験は、私にとって本当に大きなことであり、やはり伝統を守りつつも革新的に未来に挑戦するのだという、一人一人に求められる姿勢を、あのときに教えられたと思っています。

ここまでですみません。15分になっています。用意したパワーポイントはまだまだふんだんにあるのですけれども、まずは時間を守ることを優先して、ここで終了としたいと思います。ありがとうございました。

**跡部** 湯澤先生、ありがとうございました。そして、まだまだ語り尽くせないことは後のお時間で伺えればと思います。ありがとうございました。それでは、ちょうど湯澤先生が「いのちの尊厳のために」という学部理念で締めてくださいでしたが、この学部理念「いのちの尊厳のために」を深めていく報告に入っていきたいと思います。まずは浅井春夫先生から「コミュニティ福祉の視点から考える戦争について」と題して、ご報告いただければと思います。浅井先生、よろしくお願いいたします。

**浅井** はい。浅井です。よろしくお願いいたします。退職して6年たっておりますが、立教のことはいつも想っています。最近では、箱根駅伝への出場を決めてくれて、すごうれしかったです。テレビの前で釘付けでした。

思い起こすといろんなことがあるんですけども、創立1年目は他学部の先生が、沼澤先生もそうですし、さきほど、湯澤先生が話されたように、いろんな分野の先生方、事務の方々に集まってもらって、多様性ということの意味を私はそのときに少し学んだ気がしています。

そのみなさんが集まった中でも、池袋から新座キャンパスに異動されるのはどんな思いをされているのかなと考えることも時折ありました。でも、その先生方がみんな生き生きとされていて、私はコミ福に19年いましたけど、最初の10年をとってみると、すごく仲よしで、本当によかったなと思うことが度々ありました。その立教への思い、コミ福への思いは、あの10年が私の立教の原点というか原風景だと言ってもいいと思います。

湯澤先生と実習の担当をしたときに、さきほど言われた亡くなった尾崎新先生も一緒に3人で、尾崎研究室だったかな、3人でどんな実習ノートを作ればいいのかという議論をしたことをよく覚えています。そのときに、尾崎新先生が「いろ

いろと記入する枠をはめるのも、実習生の主体性を育むことにならないんだから、罫線なしで白紙のまま自由にも書いてもらえばいいんじゃないの」ということを言われたことを印象深く覚えていて、“おもしろい先生がいるもんだな”とあって……。本当にそんなことを思い出します。

きょうは、3人の先生方と、私にとっては大好きな先生たちと一緒に、リモートであっても画面で並んで話ができることを本当にうれしく思っています。

**浅井** さて、本題ですが私に与えられたテーマは、「コミュニティ福祉の視点から考える戦争について」です。今日の政治情勢では、国際的にも国内的にも「戦争」という問題を考えなくてはならない課題となっています。私は2011（平成23）年度にサバティカルを取得し、国内研究で沖縄に行かせてもらいました。そこで1000枚ぐらいの写真を撮りましたが、ベストショットはこれですね（図4）。これは振り向きざまに、レンズを覗かないでシャッターを切った写真です。



図4 2011年度研究休暇中の写真

出典：当日の投影資料

**浅井** 右側に写っているのが1年間住んだレ〇パ〇ス2〇というマンスリーマンションで、その3階に私は住んでおりました。こういうところに沖縄の暮らしがあって、まさに宜野湾市の本当にど真ん中を基地に奪われているのです。戦争を最も身近に感じるところであり、コミュニティが分断された暮らしのなかにありました。図5の下の方にある矢印が私の住んでいた所です。ちょうど、米軍基地から私が住んでいたあたりに飛行機が入ってくるのですね。

## 市街地にある海兵隊の基地 普天間基地とドーナツ型の宜野湾市



図5 普天間基地と宜野湾市の上空写真

出典：当日の投影資料

浅井 コミュニティ福祉という観点から言えば、戦争ということ、まさに福祉が死んでしまうということ（＝福死）だと思います。福祉が福祉でなくなってしまう。それは戦争が終わってもそうなのだと、戦争孤児問題の研究をする中で学びました。ここまで話した研究成果は共編『戦争孤児たちの戦後史（全3巻）』（吉川弘文館、2020～21年）、『沖縄戦と孤児院』（同、2016年）にまとめました。最近では共編『事典・太平洋戦争と子どもたち』（同、2022年）などを出版して、戦争という問題はコミュニティ福祉学部にとっては、これは絶対に忘れてはならない大きなテーマであり、そのテーマの意味はどんどん変わっているということも、いま、私たちが実体験しているところだと思います。あえてストレートに言えば、戦争に反対するということはコミュニティ福祉学部の使命ということ胸に刻まなければと思います。

図6は第2次世界大戦において、結局、罪もない民間人がたくさん死んだという現実です。兵士が死ぬだけではなく、戦争は民間人をどれだけたくさん殺すかが勝利に近づく道なのだと戦争の推進者は考えているのだと言ってもいいでしょう。ロシアによるウクライナへの侵略の実態もそうなっているのではないのでしょうか。

## 図1) アジア・太平洋戦争とはとは何であったか 罪もない民間人がたくさん死ぬという事実(図1)

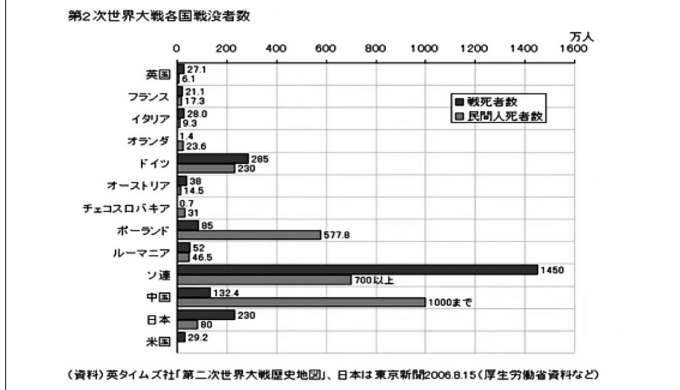


図6 第2次世界大戦各国戦没者数

出典：当日の投影資料

浅井 沖繩の「平和の礎」(沖繩県糸満市の平和祈念公園内に設置されている慰霊碑)には、戦争で敵だった人も全員刻銘されています(図7)。戦争が終結したら、死者たちにおいては、敵も味方もなくノーサイドだという思想が具体化されているのです。

表1) 平和の礎 刻銘者数  
(2022年6月現在)

	出身地	刻銘者数
<b>日本</b>	沖繩県	<b>149,611</b>
	県外都道府県	77,485
<b>外国</b>	米国 (U.S.A)	<b>14,010</b>
	英国 (U.K)	<b>82</b>
	台湾	<b>34</b>
	朝鮮民主主義人民共和国	<b>82</b>
	大韓民国	<b>382</b>
<b>合計</b>		<b>241,686</b>

図7 平和の礎 刻銘者数

出典：当日の投影資料

浅井 平和の礎に刻銘されているのは、現在、24万人という数字です。沖縄県民15万人はここに刻銘をされていますけれども、沖縄県民の次に亡くなった人が多い県はどこかというとな北海道なのですね。北海道の貧農の人たちが、沖縄戦に送り込まれたのです。

戦争においては、“貧乏人”＝貧困層から戦場に赴き、殺されていくこととなります。遺骨さえ家族のもとに返されないという問題も死者の扱いの厳然たる格差となっています。この表を見ていただいたら分かりますが、第2次世界大戦は、軍人と民間人の死者の比率は、約半々なのです（図8）。

**表3) 戦争における軍人と民間人の被害の割合**

戦争の名称と戦闘期間	軍人・兵士	民間人
第一次世界大戦(1914年～18年)	92 (合計97)	5
第二次世界大戦(1939年～45年)	52	48
朝鮮戦争(1950年～53年)	15	85
ベトナム戦争(1964年～75年)	5	95

図8 戦争における軍人と民間人の被害の割合  
出典：当日の投影資料

浅井 私が生まれた1951（昭和26）年前後の朝鮮戦争でいうと、85%が民間人。そして、ベトナム戦争に至っては、死者の95%が民間人です。したがって、近年の戦争においては、民間人がターゲットになる最大の暴力が戦争なのだとこのことを押さえておく必要があると思います。

まさに、戦争体制は、非立憲主義であり、憲法そのものを踏みにじっていくという側面があります。それから、戦時下では、社会的排除が支配的な世界でもあります。「隣組」という仕組み、あるいは非国民vs国民という二分法で非国民を排除していく。そして超貧困社会とコミュニティの相互監視の仕組みが戦争という体制の大きな柱となっています。

したがって、“お国のために”という戦時の合言葉において、コミュニティ福祉学部の理念である「いのちの尊厳のために」などは、どうでもいいことになってしまうというのが戦争の現実だと思います。

浅井 コミ福の今後のあり方に目を向けると、大事なことは、創設からの10年間で他分野の教員・学生・職員が集まりながら、多様性の中で仲よくやっていたという歴史であり、それが私の原風景なのです。やはり、戦争体制下の社会的排除が常態化、あるいは基本的な体制になっている社会に対して、このような排除を、自らの現場でやってはいけないということを共通認識としてもつことができる。コミ福は、そうしたことを実践する場所なのだと思います。

私たちは、戦争を社会と歴史の問題としてだけではなく、自らが位置している現場で、戦争につながる行動を考えてみる必要があるのではないかと思います。でも、改めて、私が思うコミ福のよさは、みんなの立場や意見が異なっても仲よく、堂々と議論できるということなのですね。それは、よく使われる言葉で表現すると、相手へのリスペクトが前提になっている態度です。

こういうコミ福で培われてきた違いを超えて仲よく議論する姿勢を、もう一度、私たちは肝に銘じておく必要があるのではないかと思います。

浅井 「いのちの尊厳のために」がコミ福のまさに使命と言ってもいいと思います。が、「いのち」とは何かということについて、私たちは考えなければいけないとも思っています。「いのち」は抽象的なものではないし、死を迎えれば命という存在はなくなることもいうまでもありません。

ここでは、2001（平成13）年にノーベル医学・生理学賞を受賞したポール・ナースの原理を紹介いたします。ポール・ナースによると、生命には3つの原理があると（Nurse, Paul 2020=2021）。第1に、生き物は遺伝子システムの中でだんだん変動していく存在という原理があります。第2の原理は生命が境界を持つ。その典型的なのは細胞から導かれる。すなわち、生命というものの原点、基本は細胞なのだと言ってもいいと思います。そして第3の原理は、生き物は科学的、物理的、情緒的な機械、つまり、マシンであるのだと言っています。このことは、味気ないなと思うかもしれませんが、戦争という観点から見たら、まさに生き物としての人間自らのからだは朽ち果てていくこととなります。細胞分裂しない。変動しない存在になることは生き物ではなくなることです。そして、生き物においてはさまざまな情報を得ながら、協調的に制御されている存在でもあるといえます。本来、生き物は目的を持った物体として、総体として機能するものであるにもかかわらず、戦争によって、総体として機能しなくなってくるという、生き物としての人間の肉体がバラバラになっていくことがあります。こうしたことを踏まえて、私は、「いのち」という問題を、このコミ福という福祉系の学部がどう捉えていくのかを、もう一度考えてもいいんじゃないかなと思います。

浅井 次に紹介したいのが、1955（昭和30）年に出た『臨時軍事費』という本な



のですが、立教大学新座図書館から借り出して読みました。ここで考えたいのが、戦争が終わる前年の1944（昭和19）年の国家予算です（図9）。

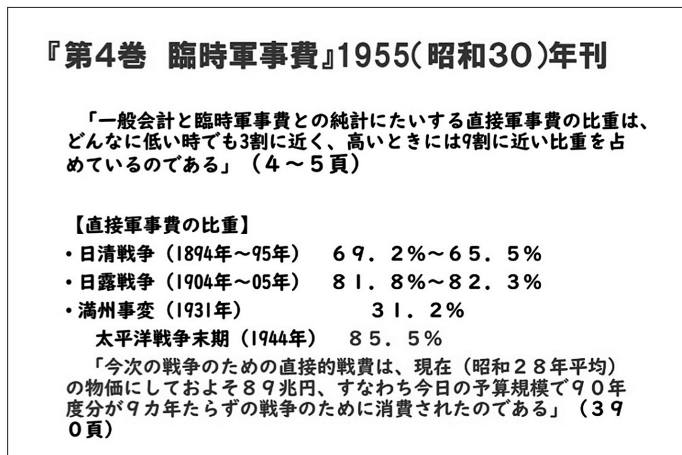


図9 1944年の軍事費  
出典：当日の投影資料

浅井 太平洋戦争末期1944年の国家予算の85.5%は戦争経費です。その中心は戦車や爆弾製造にかかる物件費です。国家予算の内訳がこういう状況になれば、当然、超貧困社会になることは必然です。この本が執筆された1953（昭和28）年の時点で、およそ89兆円となっています。すなわち、1950年代の予算規模で90年度分が9ヶ年足らずの戦争のために消費されたのですね。こうやって戦争は、「いのち」を大切にしない、人間を大切にしないし、本当に物質的な意味で豊かなものも放棄してしまうのだと思います。

私の研究分野のひとつは沖縄の戦争孤児の問題です。スッペ孤児院は、サイパン島にあった孤児院です。沖縄市にあったコザ孤児院もこういう状況です。つまり、歴史的に見ると、戦争が終わっても子どもたちがどんどん死んでいくのが実際でした。戦争は、戦争をしている、敵と味方に分かれて交戦しているときだけではなくて、その後も「戦争の惨禍」（憲法前文）が続くのが、とくに敗戦国の状況です。

第2次世界大戦後に、日本では、福祉三法が、児童福祉、障がい者福祉、それから生活保護というかたちで成立してきました。日本の戦後の福祉の再出発には、戦争の後始末の役割＝応急対策が待ち受けていました。そのことに想いを馳せることができるコミ福の仲間でありたいと思います。

## 私がデザインする国づくり・コミュニティ政策



図10 「実習指導」の授業の宿題

出典：当日の投影資料

浅井 スライドにあげた写真（図10）は、コミ福の実習の授業で受講生がつくったものです。「子どもたちが朝食後に食べたいと思うリンゴをつくってみる」という宿題を出して、つくったものです。このちょっとした問題意識は、自分たちの暮らしは自分たちでどうつくっていくのかを、自分たちで考えてみるということなのです。相手を想いながら料理やおやつをつくることも少し意識してみるのもいいかなと思います。戦争への問題意識も想像力が問われる課題と思います。

浅井 最初の発言のまとめとして、憲法97条を紹介しておきます。

**第97条** この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。

「努力の成果」と書いてあるのですが、努力は英語のstruggleの訳となっています。それを「努力」というふうに日本では訳していますが、この辺も含めて、戦争は最も非福祉的な行為であるということを、この発表の最後のまとめといたします。

ニュージーランドの内閣は、また後でお話ししたいと思います。以上でございます。

**跡部** 浅井先生、ありがとうございます。15分で話すには非常に大きなテーマのところ、納めていただきありがとうございます。そして、チャットもいろいろいただいてありがとうございます。また、私のアナウンスが滞っていて恐縮なのですが、本日の配布資料やシンポジストへの質問を寄せるフォームへの接続先はチャットに流しましたので、シンポジストの先生方へのご質問があるみなさま、報告中でも忘れないうちにお寄せくださって大丈夫です。チャットでも、フォームでも、遠慮なくお寄せいただければと思います。

それでは、浅井先生の話提供の中で、自分たちの暮らしをどうつくるかを自分たちで考えるというお話があったかと思いますが、続きまして鈴木弥生先生に、英語を用いた授業によってグローバルな視点を持つことを教えていらっしゃる中で、どのように学生の想像力を豊かにしながら、グローバルな規模で、自分たちの暮らしを考えていく教育実践をされてきたのか。また、弥生先生は、研究の中でもグローバル化の負の側面を見つめながら、「いのちの尊厳」に非常に向き合っただけでこられたと思います。15分という短い時間で恐縮ですが、鈴木弥生先生、「グローバルな視点から考えるコミュニティ福祉：Think globally act locally」と題したご報告をよろしくお願ひいたします。

**鈴木** はい。よろしくお願ひいたします。鈴木弥生です。資料はチャットの中にあると思います<sup>(1)</sup>。ただいまご紹介いただいたタイトルについて「コミュニティ福祉についてグローバルな視野からとらえ、そのうえで行動する」ととらえています。まなびあい運営委員会より「英語を使った講義の経験をもとにグローバルな視点をもつことの重要性を語っていただければ」というご連絡をいただいておりましたので、その背景について簡単にお話します。

まず、グローバルな視点についてですが、「今日のグローバル社会において、私たちの生活は必然的に多くのつながりの中にあるということ、例えば、農作物、衣類やスポーツ用品といった商品が、第三世界の貧困層によって、劣悪な環境の中、安い賃金で生産されているというグローバル規模でのつながり」を私はいつも意識しています。

そのため、私は第三世界で生活する貧困層の問題に関心があって、1997（平成9）年に初めてバングラデシュ人民共和国（以下、バングラデシュと略称）を訪れ、12回ほど調査を行いました。また、バングラデシュ出身の移民労働者の実態を探るようになって、いくつかの国・地域でも研究を行ってきました。バングラデシュの調査対象地域は、日米主導による援助と大規模開発によって近代化が推進された地域（クミッタ県）です。その影響から道路開発計画のためにスラムが強制的に撤去されたり、近代農法の普及によって農業労働者が多額の借金を抱えるようになったりという現状がみられます。そのため、貧困層が出稼ぎ労働者と


して湾岸諸国など海外に出向くようになっていきます。

2000（平成12）年当初「将来は医師になりたい」と勉強に励んでいたAさんが、大学を中退してアラブ首長国連邦（United Arab Emirates: UAE）に出稼ぎに行ったという現状に衝撃を受け、この青年を追いかけてUAEに3回ほど出向き、多くの方々から現地の移民労働者の実態をお聞きしました。そこでは、例えば炎天下での危険な建設労働や、出稼ぎ就労時に負った多額の借金返済に追われて家族に送金できない（Aさん）といった厳しい労働・生活実態が明らかになりました（鈴木 2016）。

さらに、ニューヨーク市でも移民労働者の現状をみてまいりました。その現状に関心を持ち、研究調査を継続しています。ニューヨーク市はグローバルな展開をみせる多国籍企業と金融機関の一大拠点と言われていますが、これら周辺領域に関わる労働需要が移民を集中させるグローバル都市でもあります（Sassen 2001）。そこには社会問題もありますが、さまざまなエスニック・コミュニティ、さまざまな言語、文化の多様性がみられます。コロンビア大学のキャンパス内では、学生たちによって「イスラエルは占領をやめるべき」と書かれた立て看板が設置されていて（2017年3月）、この学生たちは、「日本の学生と意見交換がしたい」という関心も示していました。

私はこのような経験から、さまざまな言語や文化の多様性に触れたり、当事者の声を通して社会問題を学んだりといった環境があれば、日本の学生たちも刺激を受けたり、学んだりするよい機会になるのではないかと考えていました。そのような中、立教大学が掲げる学びの特徴（図11）をみると、まさに私の思いと合致していて、具体的な科目の展開を考える中で、全カリコラボレーション科目の趣旨「異なる価値観、多面性、多様性」の中に可能性を見出しました。

**立教大学ならではの学びで養う3つの力**



- 1 国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく変革力。
- 2 豊かなコミュニケーション力で、異なる文化・習慣を持つ人々と共に課題を解決する共感・協働力。
- 3 地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する思考力。


出典 「立教大学の教育の特徴」  
<https://www.rikkyo.ac.jp/education/>  
(最終アクセス、2022年11月18日)。

図11 立教大学ならではの学びで養う3つの力

出典：当日の投影資料：「立教大学の教育の特徴」<https://www.rikkyo.ac.jp/education/>  
(最終アクセス、2022年11月18日)

鈴木 そこで2018（平成30）年度から現在まで、“Local People’s Perspectives in International Culture and Social Problems”（2018～2020年度、春学期開講）、および、“Local People’s Perspectives in Social Development”（2018年秋学期、2021～2023年秋学期開講）という2つの科目（英語授業）を、各年度において継続してまいりました。授業の目標はスライドの通りです（図12）。

## 授業の目標



**Native** と学ぶ海外の文化や社会問題

- グローバルな視野から海外の文化や社会問題への関心を高めると同時に、さまざまな事象を分析する力を養うことを目的とする。
- 広い世界に目を向けて、グローバルな視野から学ぶことの楽しさを理解する。

**Native** から学ぶ社会開発

- 経済成長を重視して行われてきた開発の問題点を分析する。また、社会開発の重要性について学ぶ。社会開発の推進媒体として、国際NGOの理念と活動実態、草の根のコミュニティを基盤とする貴重なアプローチについて理解を深める。

図12 授業の目標：Local People’s Perspectives in International Culture and Social Problems 及び Local People’s Perspectives in Social Development

出典：当日の投影資料

鈴木 図13・図14の通り、学生は授業を真剣に聞いていて、学生が集中して楽しそうに学んでいる様子を見て、当初から私も満たされる思いでした。

授業風景（\*写真使用の了解を得ています）  
特長：学生が真剣に聞いている



図13 授業風景：Local People’s Perspectives in International Culture and Social Problems

出典：当日の投影資料（写真はSuzuki et al.2020より転写）

授業風景（\*写真使用の了解を得ています）  
特長：学生が前方から着席する  
食い入るような眼差し、私語がない



図 14 授業風景：Local People's Perspectives in International Culture and Social Problems

出典：同上

**鈴木** 授業評価アンケート（自由記述）には、「英語も社会開発も学べる点が魅力的」、「本当に大切な力をつけられた」、「自分の考えと向き合う時間も増えて刺激を受ける」、「英語で受ける授業は貴重」、「大学の授業を初めて英語で学び、学問のおもしろさを改めて考えることができた」、「ゲストの方や先生と話すことによって他の授業より先生との距離が縮まり理解が深まった」などと書かれていて、好評だったので、このような授業内容について、演習科目等でも展開したほか、コミュニティ福祉研究所の助成による講演会も2回開催しました。ゲスト講師の出身国・出身地域は、14カ国・地域になっています。

本日は、浅井先生の講演内容もかなり意識しまして、紛争や戦争を体験されている研究者や当事者による講演会や講義に絞り込んで、それぞれの概要や受講学生のコメントを中心にご紹介します。

**鈴木** まず、バングラデシュ出身のアザド, K. ムンシさんの講義は、「アマル・シヨナル・バングラ（我が黄金の大地）」というテーマのもと、バングラデシュの歴史、文化の多様性、宗教、言語などに焦点をおいた内容でした。受講生の声としては、「バングラデシュ出身者の講義は初めてだったので貴重な機会になりました」、「宗教やモスク、イスラムの持つ穏やかさ、寛容さを理解することができました」、「ベンガル語公用語化運動をダカ大学の学生が主導していたこと。それが独立・解放戦争につながり、1971年のバングラデシュの独立を導いていることを理解しました。そこででの学生の役割に驚いて、自分だったらどうするか、逃げてしまうかもしれないと考えました」等といったコメントが寄せられました。

また、多くの質問が出された中で、アザドさんは、一つひとつの質問に対して、

非常に穏やかに回答されました（以下は回答の一部です）。

自分が生まれ育った環境から必然的に多言語を必要としたこと。宗教とは本質的にはお互いを理解し、助け合い、決して争うものではないこと。日本の学生に対して私から助言できるようなことはないですが、紛争のない世界に生まれ、育ち、こんなにも学ぶ機会に恵まれているあなたがたはとても幸せだと、私はいつも思っています。でも、それに気がついているかどうかは重要なことかもしれません。

また、アザドさんは、2016（平成28）年7月に起きたダカ事件にも触れています。その他「バングラデシュで有名なスポーツは何ですか」という質問に対して、カバディを紹介されて、受講生を巻き込んで披露されました。これによって会場の雰囲気が非常に和んだことから、スポーツがもたらす効果やその役割を認識しました。

**鈴木** 続いて、イーリヤ・ムスリンさんによる「理想の社会は存在するのだろうか」という講義をご紹介します。イーリヤさんは、セルビア、すなわち旧ユーゴスラビアの出身ですので、そこでどのように理想の社会を構築しようとしていたのかということ、とりわけ、スターリンとの決別以降、独自の社会主義の構築を模索していたことについて話してくださいました。

ご自身の経験を踏まえられていることから、受講生のコメントとしては「旧ユーゴスラビアの予習をしてもよく分からなかったにもかかわらず、イーリヤ先生の英語授業を通して、その状況がずっと自分の中に入ってきて理解することができた」、「アメリカ合衆国（アメリカ）では、子どもの頃から社会主義はよくないと教えられ、金銭的に豊かになるようにと言われてきた。しかし、それは一方向的な見方である。人々が、なぜ、このようなコミュニティに参加しようと考えたのかを理解することができた。公平性に近づけるのであれば私もそうしたいと思う。なぜなら、COVID-19以降の格差拡大は、アメリカ資本主義の脆弱性を露わにしている。このような視点を持つことができたことから、この講義に感謝している」、「社会主義といっても様々な形態があり、すべて善悪で決めつけることの誤りに気がついた」、「この講義では、人々の多様な背景や違いを尊重していて、多様な背景を持つ自分自身も歓迎されていると感じる」等、たくさんの反響がみられました。

アマルティア・センは経済成長重視の開発を批判していますが（Sen 2007）、本書では資本主義体制を問題とするまでにはさかのぼってはいない。現在、日本社会においても資本主義体制のシステムを自明の理としていますが、イーリヤさん

の講義で何度も出てくるのは“ordinary working people”という言葉であって、具体的には、次の3つの事例が紹介されました。

第1に、旧ユーゴスラビアの紙幣に印刷されているのは有名人ではなく労働者であること。第2は、組織の経営、生産過程、労働時間を始めとする労働条件のすべてにおいて労働者に決定権があること。第3に、労働者には家屋が無料で提供されたこと。第4に、教育費は高等教育まで無償であることです。

このように、イーリャさんの講義では、いわゆる社会主義国といってもそのシステムはさまざまであるということを当事者の生きた経験と分析を通して学ぶ機会となりました。

**鈴木** 次に紹介するのは、イスラエル出身のダニー・ネフセタイさんによる講演・講義です。テーマは「核兵器や戦争のない平和な社会の構築に向けて何をどのように考えるべきか、何をすべきか」というものでした。イスラエルでは、第2次世界大戦が終わって数年後の1948（昭和23）年から今日に至るまで軍事力が強化され続けていること、その背景にある大国の関与によってパレスチナの地が剥奪され続けていること、パレスチナの人々が抑圧に苦しみ続けている現状について分析しています。その他にも、1967年以降、ゴラン高原がイスラエルの占領地域になっているということにも言及されました。

イスラエルでは高校卒業後の18歳で入隊することが義務付けられています。多くの若者は、この時点で入隊に対して疑問を抱かないということです。それは初等教育とも関係しています。ダニーさんの著書『国のために死ぬのはすばらしい?』にも書かれていますが、イスラエルでは、小学校から「国のために死ぬのは良いこと」と教えているということです（ダニー 2016）。これを聞くと、毎回、驚きの声をあげている受講生がいる。立教生たちは、教室ではあまり感情を出さなそうですよね。それにもかかわらず、この時だけは「えー」と声をあげて反応する。そんな学生の姿に、正直、安心している自分がありました。学生たちは「いのちの尊厳」を理解していると感じるからです。

ところが、ダニーさんは、こうした安心とは異なる日本社会の別の側面を分析して、講義の中で以下のように提示されました。

参加者のみなさんは、「パレスチナとイスラエルから相当離れている日本に共通点は見いだせない」と言うかもしれませんが、「日本とイスラエルには共通点がある」。日本の小学生は、第2次世界大戦中、戦地に行く軍隊を称賛しなければならなかった。教育を受けた青年たちが戦地に送られ、尊い命を落とした。



それは77年前と随分前のことになりますけれども、私は、ダニーさんの話を聞いて、ワシントンD.C.のスミソニアン博物館にも批判的視点から写真が展示されていることを思い出しました（展示名：Death for Family and Country）。

ダニーさんの講義の話に戻ります。この講義でも質疑応答が活発に行われまして、とりわけ「現在の危機的な状況を打破する何をすべきか」ということで、私の演習を履修する学生たちも発言してくれて、活発な議論が交わされました。

さきほど、浅井先生もおっしゃっていましたが、日本の軍事費の引き上げが問題であり、世界的に見ても軍事費や軍需産業の拡大は際限のない紛争、戦争、そして巨大な荒廃をもたらすことや、日本の原子力発電所と福島をはじめとする災害危機的な状況にも言及されました。この言及を踏まえて、参加者の多くは問題意識を高め、質疑応答が続きました。そして、受講生のコメントには、「現在の危機的な状況を打破するために声を上げること、沈黙を破ることの重要性を認識いたしました」と寄せられました。

**鈴木** 最後に、ガムラ・リファイ（本人の希望に基づき敬称略）による“Syria, what happened and why it happened: Once beautiful ancient cities that were my homeland”というテーマに基づいた講演の概要をご紹介します。かつて美しかった古代都市シリアやダマスカスにおいて、何が、なぜ起こったのか（背景に何があったのか）というテーマですね。かつてのシリアの風景は、美しいピスタチオの花が咲き誇り、首都ダマスカスには伝統的なカフェやレストランがあって、主食のパンを焼き、クリスマスシーズンになると宗教の異なる人々が対立することなくそれぞれの方法で祝う。そして、パレスチナ難民を受け入れていたというのが、かつてのシリアです。

ところが、シリアの人々は寡頭政治への不満を抱いていたのです。2011年に何が起こったかという、政治体制の改革、民主化、言論の自由を求めるデモがあって、変化の波が訪れることを信じていた人々のデモは、当初、平和的なものだったのですが、政府は武器を使ってデモに参加している人々を弾圧するといった手段を講じました。人々はこれに非常にショックを受け、怒っていたのですけれども、次第に、無秩序と不安が他の都市にも拡大し、国際社会のシリアへの介入が失敗します。このことが紛争を複雑にし、人々は深刻な危機に直面し混乱に陥っています（Ghamra and Suzuki 2021）。

ここでガムラは、「私たちが兵士だったら、武装していない仲間の市民を殺すという大統領の命令に従いますか」と受講生に問いかけました。大統領の命令に従わない場合、刑務所で残酷な拷問を受ける、もしくは、処刑される危険性もある。このガムラの問いかけに対する参加者の声を紹介します。

ディスカッションで自分が当事者だったらということを考える中で、命の選択をかつて美しかったシリアの場でしなくてはならないという辛い現状を知った。

この講演会には、さきほど紹介したイスラエル出身のダニーさんも参加していました。同じグループになった参加者からの感想です。

グループにガムラさんとダニーさん、どちらもいらっしゃって、国と国ではなく人と人として話し合えば、こんなにも思いが伝わり、誰もが争いのない社会を求めていることを実感できた。

ダニーさんの声も、ご本人の許可を得ていますので紹介したいと思います。

敵と教え込まれた国の人がこんなにすてきな人であることを知った。18歳のときにあなたを知っていたら、私はイスラエルへの入隊を拒否していた。

シリアの惨状は続いています。2011年以降、多くのシリア人が国内避難民となって生存を維持するか、二度と祖国に戻れないという覚悟でシリアから離れるか、あるいは、最も尊いものと教えられてきた命を落とさなければならなかったのです。そのうえ、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、人々の生活環境はかつてないほど厳しいものになっています。

ガムラは参加者にアラビア語のウェブサイトで見つけた写真2枚を提示して、付随するアラビア語を英語に訳して次のように紹介しました。ここでは、私が日本語に翻訳して紹介します。

パン、ガソリン、砂糖と水を求める長い列があります。そして私たちは、死、慈悲、救いの順番を待っているというものです。

2021（令和3）年1月18日が、ガムラの日本での最後の講演会になりました。ガムラは日本で永住権を取れる見込みがないことから第三国へと出国しました。私は、ガムラに向けて、学生たちと次の言葉を用意しました。

In spite of such difficult conditions, Ghamra will never lose her presence of mind and hope and will try to shape her future by herself. We admire her spirit.  
（このような困難な状況にもかかわらず、ガムラは気持ちを乱すことなく、そして希望を失うことなく、自分の力で未来を切り開こうとしています。私たちは

その精神を賞賛します)。

そして、どこに行ってもあなたのそばにいたい。さよならは言いたくないので、またお会いできると信じていますという意味で、We love youと伝えました。これに対してガムラはすぐさまマイクを持って「I love Rikkyo students」と言ってくれました。「親愛なるガムラ、私たちはあなたを誇りに思い、あなたの無事を、いま、祈っています」と伝えたところで、ちょうど15分になりましたので終了させていただきます。聞いてくださってありがとうございます(2)。

**跡部** 鈴木弥生先生、ありがとうございます。言いたいことがたくさんある中、お時間を守ってください、ありがとうございます。後ほどディスカッションの時間もありますし、みなさまの聞き足りないことはチャットにでも、質問用のフォームにでもお寄せいただければと思います。

それでは最後に沼澤先生から、「コミュニティ福祉学部でスポーツウエルネス学科が行ってきたこと」と題して、スポーツウエルネス学科がコミ福で誕生した経緯とコミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の卒業生・在学生に対する今後に向けての展望をご報告いただければと思います。よろしく願いいたします。

**沼澤** スポーツウエルネス学科の沼澤です。よろしく申し上げます。「コミュニティ福祉学部でスポーツウエルネス学科が行ってきたこと」というタイトルでお話しさせていただきたいと思います。実は2023（令和5）年から新しくスポーツウエルネス学部としてコミュニティ福祉学部から出て行くことになりまして、このシンポジウムではこの25年間でスポーツウエルネス学科は何をしてきたのか、しっかり、ふりかえることが重要だと思ひまして、コミュニティ福祉学部で行ってきたことをまとめました。

それでは、本日は、なぜスポーツウエルネス学科がコミ福に誕生したのかと、スポーツウエルネス学科が行ってきたこと、そして、スポーツウエルネス学部の紹介をすることでコミ福の現役生、スポーツウエルネス学科の現役生と卒業生に向けてのメッセージに変えさせていただきたいと思っております。

**沼澤** なぜ、立教大学コミュニティ福祉学部の中にスポーツウエルネス学科ができたのかということを考えていきますと、戦後の大学教育までさかのぼることになります。それは、大学教員の中でスポーツの教員だけ少し位置づけが異なっていたところから話さないと、なかなか理解できないところがありますので、大学におけるスポーツ教育の歴史を少し話していきたいと思ひます。

第2次世界大戦後、1948年にアメリカ占領軍が日本に大学を創るということで

始まったのが、日本における新制大学なのですが、その当時、日本の中で、特に若年層に結核などの感染症が流行っていて、やはり、「若い人たちが健康でいなければいけない」との認識から、大学ではずっと保健体育の講義2単位と体育実技2単位が必修だったという歴史があります。その方針が、立教大学の中でもずっと続いてきましたが、1991（平成3）年の大学設置基準の大綱化、いわゆる「大学大綱化」で、一般教育科目36単位、外国語科目8単位、保健体育科目4単位が必修科目から選択科目に転換されたときに、立教大学は外国語の8単位を必修に残して、一般教養科目と保健体育科目は選択科目にしました。


立教大学は1993年に全学共通カリキュラム運営センターを設置しました。その当時、私が立教大学に来たときには一般教育部があり、一般教育科目を担当する語学の教員、スポーツの教員、情報教育の教員、それから一般教養科目の教員が集まっていました。その一般教育部が発展的に解消されるときに、一般教育部に所属していた教員がどこかの学部へ転籍することになり、スポーツの教員はできるだけ親和性の高い、そして活動の場所がある新座キャンパスのコミュニティ福祉学部へ所属するという選択をしたのが、コミュニティ福祉学部でスポーツウエルネス学科が誕生することになるひとつのきっかけになります。

**沼澤** そして、1998年に新座キャンパスにおいて観光学部とコミュニティ福祉学部の2つの学部ができたのですけれども、2008年、コミュニティ福祉学部ができて10年後にスポーツウエルネス学科ができたという経緯になります。

なぜ、「スポーツウエルネス学科」なのかというと、スポーツだけではなく、福祉マインドを持った人材を育成するという中で、「すべての人のためのスポーツ」を体系的に捉えた初めての試みとして、スポーツウエルネス学科をつくりました。そして、福祉学科、コミュニティ政策学科とスポーツウエルネス学科の3学科が有機的に統合して、より新しい福祉を創造していくのだと、学部理念「いのちの尊厳のために」を中心に置きながら、学科間でいろんなことができるようなかたちのカリキュラムをつくっていくことになりました。たとえば、福祉とスポーツウエルネスとの関係であれば、ハンディキャップを持つ人たちの支援や援助も考えられるだろう。それから、コミュニティ政策学科とスポーツウエルネス学科との間で考えるのであれば、よりよい暮らしのためのコミュニティ形成を考えていけるのではないかと、他大学の福祉系学部にはないようなことができるのではないかと、ということで3学科体制が始まりました。

**沼澤** ここからは、スポーツウエルネス学科が取り組んできたことについて、第1に授業の関わり、第2に研究活動の関わり、第3にスポーツの関わりというかたちで、3つに分けてご紹介していきたいと思います。

第1に、スポーツウエルネス学科の取り組みの授業での関わりは、2007（平成19）年度のコミュニティ福祉学部のウエルネス分野の専門科目の担当者の案を例にもってきました（図15）。

**スポーツウエルネス教員の授業への関わり**  **立教大学**

---

2007年度 コミュニティ福祉学部 ウエルネス分野 専門科目担当（案）

**【松尾】**

- ・スポーツ政策（1）：兼任？
- ・福祉とレクリエーション（1）：兼任？
- ・専門演習（2）

**【沼澤】**

- ・ウエルネスと福祉文化特論1（1）
- ・基礎演習（1）
- ・福祉ワークショップ（福祉：1）？

**【濁川】**

- ・ウエルネス福祉論（1）
- ・フィールドスタディ（政策：2）
- ・卒研演習

7

図15 2007年度 コミュニティ福祉学部 ウエルネス分野 専門担当  
科目（案）

出典：当日の投影資料

**沼澤** このように、一部の教員が専門演習や基礎演習、卒業研究それぞれの専門科目を担当していました。他にも、非常勤講師の先生方のお力を借りながら、コミュニティ福祉学部の中で、ウエルネス関連の科目を展開しておりました。

2008年にスポーツウエルネス学科ができてからは、このように学部共通科目や専門必修科目、基礎科目、期間科目などについて体系的にカリキュラムを編成して授業を展開してきました。特に専門科目の中では、多くの科目を実施し、学科の教育を担ってきました。

その他にもインターンシップや異文化スタディなども、スポーツウエルネス学科の教員も担当しながら、学部のインターンシップや海外プログラムにも関わってきました。

**沼澤** 次に、研究における関わりにつきましては、まずコミュニティ福祉学部で、平成18年～22年（2006年～2010年）に、文部科学省からの外部資金を獲得して、「21世紀社会におけるアミューズメントの理論化と応用に関する研究」というプロジェクト研究、学内ではRARC（らるく・立教大学アミューズメント・リサー

チセンター）と呼ばれている学術フロンティア推進事業に取り組みました。これはコミュニティ福祉学部だけではなく、新座キャンパスの現代心理学部と観光学部も合わせた3学部全体の事業だったのですが、この事業の中で複数のスポーツウエルネス学科の教員が関わりながら、外部の大学からも研究者を招いて、研究活動を展開しました。

続きまして、様々な研究の取り組みがあったのですが、Sport Policy for Japanをご紹介します。毎年行われているSport Policy for Japanの研究発表のコンペティションなのですが、最優秀賞や優秀賞を受賞されている松尾先生のゼミがあります。

松尾先生のゼミだけではなく、日本体育学会（現日本スポーツ・健康・教育学会）、フットボール学会の優秀発表等、多くの学会で院生や学生が賞を受賞した実績もございました。

科学研究費の助成事業、いわゆる科研費について、コミ福は他の学部よりも、結構、採択数が多かったりするのですが、これは福祉学科やコミュニティ政策学科の先生の採択数も多いし、その中で、スポーツウエルネス学科の教員も何名か採択されているので、学部として他学部よりも多い採択になっているのではないかと思います。

また、海外での研究発表としては、コロナになる前は毎年いろんな大学院生、専任教員とでヨーロッパやアメリカ等で開催される学会に研究発表に行くということもありました。大学院に関していえば、コミュニティ福祉学研究科の博士後期課程は、2008年に学部ができて、その学生が4年間たって2012（平成24）年に学部を卒業して2年間修士課程、博士後期課程は2014年からになりますから、今年2022（令和4）年までの10年ほどで前期課程を47名修了、そして、博士後期課程で11名が学位を取得いたしました。

**沼澤** 最後に、卒業生・現役生の活躍をご紹介します。卒業生の鈴木なな子さんは、ボクシングの第5代日本女子ミニマム級王者になっていらっしゃいます。あとは野球ですね。今年度の立教大学野球部主将はスポーツウエルネス学科の学生です。東京六大学野球を見に行くと、神宮球場のバックスタンドの電光掲示板に、ベンチ入りメンバーの名前とともに学部名も表示されるのですが、秋のリーグ戦では、ベンチ入りメンバーの大体半分がコミ福の所属でした。

浅井先生にも言っていた箱根駅伝は、予選会で上位10人の合計タイムで正月の本大会の出場が決まるのですが、この上位10人のうち、5名がスポーツウエルネス学科の学生です。

**沼澤** 最後1分ぐらいいただいて、スポーツウエルネス学部を紹介いたします。

スポーツウエルネス学部は、立教大学全体では11番目の学部、新座では4番目の学部になります。現在の1学年110名体制から230名体制、4年間で920名規模の学部になります。他大学から比べると10年以上遅かったかもしれませんが、特色ある学部になるのではないかなと思います。学部の学びの拠点としては、これまでプールがあったところに、新棟、すなわち、研究室、実験室を含む建物が、建つ予定になっておりまして、ウエルネスステーション（仮称）ができてスポーツウエルネス学部の拠点となります。

このようなかたちで学部として独立させていただくことになりました。ただ、スポーツウエルネス学部の理念「すべての人の生きる喜びのために」は、コミュニティ福祉学部の理念「いのちの尊厳のために」を受け継いでいると、われわれは考えております。スポーツウエルネス学部で養成するその人間像は、コミ福の理念を継承してやっていきたいと思っています。

**跡部** 沼澤先生、ありがとうございます。戦後の歴史からひもといていただきながら、スポーツウエルネス学科ができた経緯を詳しくご説明いただきありがとうございます。

それでは、これからシンポジスト間の議論に移っていききたいと思います。私の力不足が露呈してしまうところではありますが、少し司会の立場で先生方の議論をふりかえりながら、それぞれの先生方にご質問していけたらと思っています。

さまざまな論点が出てきましたが、今回は、コミュニティ福祉学部の理念に引き付け、「いのちの尊厳」の視点から25年をふりかえるというテーマを設定しておりますので、浅井先生からご提起のあった「いのち」とは何かというところを改めて考えていく時間にできたらと思っています。

湯澤先生のお話では福祉以前に、すなわち、福祉の本質である「よりよく生きることや一人一人の生命力を徹底的に応援する」こと以前に、差別、抑圧に向き合っていく必要があるというお話があったかと思います。闘っている人たちにつながっていくことが、まず福祉であるというご提起がございました。

この闘っている人たちにつながっていくことに関しましては、鈴木弥生先生のご報告でも、受講生のコメントの中に「声を上げること、沈黙を破ること」という、まさに「いのちの尊厳」のために闘っていくこととも受け取れるようなご感想があったかと思います。

「いのち」とは何かというところ。少し大きな話にはなってしまうのですけれども、それぞれの先生方が考えていらっしゃることも、たとえば、闘っている人たちにつながっていくことですか、受講生から「声を上げること、沈黙を破ること」というコメントが出てきた経緯であるとか、そういった気づきが生まれる場になるために、鈴木弥生先生が授業実践の中で大事にされてきたことなどがあれ

ば少し伺いたいと思います。

また、学部の創設当初、尾崎新先生が授業を公開してくださっていたり、本当に「いのちの尊厳」を大事にしながら学部運営をしてきた歴史がコミ福にはある。浅井先生の言葉では、みんなの立場や意見が異なっても、仲よく議論する。そこには相手へのリスペクトがあるんだというお話があったかと思うのですけれども、この話は、鈴木弥生先生の受講生のコメントの中にある「人と人として話し合えば、こんなにも思いが伝わる」という言葉にも通ずると考えました。集団と命という提起が、浅井先生からもあったと思うのですけれども、人間と人間として、「いのち」としてつながれば、それぞれをリスペクトし、尊重し合うことができるはずなのに、国同士集団同士になると、それが難しくなっていく……。社会体制という問題もありますし、浅井先生がどう暮らしをつくるかを自分たちで考えるという言葉で提起されたようなところもあるかもしれません。「いのち」とは何かを掘り下げの中で、集団と命に関しましても、お考えがあればお聞かせください。

沼澤先生は、「すべての人の生きる喜びのために」を理念に、これから学部運営されていかれると思いますが、スポーツが果たす役割ですね。すべての人のスポーツということであったり、人間と人間として、「いのち」と「いのち」としてつながり合えるというところでスポーツが果たす役割ですとか、コミュニティ福祉学部のスポーツウエルネス学科として研究されてきたこと、学生に伝えてきたことをお話しいただければと思います。

すみません。とてもざっくりとした議論になっていますが、「いのち」とは何かというテーマに即しながら、他の先生のご報告を聞いて新たに考えたことととか、それぞれにまた言いたいことを少し聞いていく時間にしていただければと思います。

それでは、ご報告順に便宜的にご指名していきますが、私の授業はいつも「パスもOKです」「後から話すのもOKです」ということでやっておりますので、率直にもうちょっと考える時間が欲しいという場合には、後から話していただいても、この質問はパスでということでもまったく差し支えございませんので、まずは湯澤先生、現時点でお考えのことがございましたら教えていただけますでしょうか。

**湯澤** はい。壮大かつ的を射た提起をいただいたと思っておりまして、どこまで答えられるかやや自信がないところでもありますが、少しお時間をいただければと思います。

「いのち」とは何かということを考える点について、さきほどお話しできなかったソーシャルワークのグローバル定義の話をしたと思います。ソーシャルワークのグローバル定義においては、ソーシャルワークの大原則は、人間の内在的価値と尊厳の尊重、危害を加えないこと、多様性の尊重、人権と社会正義の支持と



示されています。そして、やはり、ソーシャルワークの大原則の中に「第三世代の権利は、自然界、生物多様性や世代間平等の権利に焦点を当てる」とあるように、人間の命のみが命ではない、人間中心主義の命のみでは存在してはいないという視点が重要です。これは当たり前のことですが、「いのち」そのものが自然界であり、この宇宙でありという、その中に人間が存在するのだという点をこそ、佐藤研先生は提起して下さったのだと思っています。

もう1つ、ソーシャルワークのグローバル定義には、市民的権利や社会経済的、文化的権利のことが書いてあります。人間はひとりの「いのち」のみでは生きられない、という点をいかに考えるか、ということが問われていると思います。よく「他人事ではなく自分事として考えましょう」ということが言われます。それは大事なことではありますが、思いやりだけではともに「いのち」を尊重し合える社会にはなりにくい側面があります。

私がいつも学生さんに言っているのが、「自分の足元で何かを踏みつけてないか」、そこに対しての自覚が必要、ということです。人間は、知らない間に自分の足元で地球を踏みつけているのが、いまの気候変動の問題だと思っています。身近な家族という点ではどうでしょうか。私は家族の研究をしている中で、“やっぱり踏みつけてきたんだ”と思い知らされたのが、出自によって生まれたときから差別があるということなのです。

たとえば、日本は「嫡出子」と「非嫡出子」として、生まれてきた命に選別をつけてきました。「非嫡出子」には、相続分や戸籍の続柄記載方法で差別的な対応をしてきたのです。“私はそういう差別の構造を温存してきた戸籍制度に登録をされている。そこで私は既に誰かを踏みつけているんだ”ということを現場で働きながらすぐ感じてきて、私自身は、戸籍に登録するということから、なるべく違う生き方を選択してきました。

やはり、「何を踏みつけているのか」ということに、お互いに自覚的になりつつ、個人的な力量のみならず集団的な力で、その自覚を高めていくところに、連帯というものがあるのかな、と感じています。以上です。では、次は浅井先生、お願いします。

**浅井** はい。ご指名ありがとうございます。バトンタッチいたしました。私が「いのち」にこだわっているのは、コミ福の理念ということであるとともに、いま、生命、いのち、命が盛んに多用されている現実があって、「どこに導こうとしているのか」という社会、政治の動きも含めて、“生命という用語の落とし穴”を感じるからなのです。道徳教育のキーワードは生命（いのち）です。

この前も内閣府の男女共同参画局に行って、「生命（いのち）の安全教育」について意見交換をしました。これは文科省が2023年4月から本格的に始める予定に

なっています。それで、なぜ内閣府に行ったかという、内閣府が「生命（いのち）の安全教育」の教材を、内閣府と文科省が協同して作成している経緯があって、「過激な性教育」があったかのように局長が発言していることへの抗議も含めて内閣府に行きました。そこで「いのち」の定義はどう考えていますかと聞いたら、答えられないのです。教材の作成者が答えられないことをテーマに、子どもたちに「生命（いのち）の安全教育」を教えようとしているのですかという問題です。

まったく個人的な意見を言うと、「いのち」という用語を簡単に言えば、「からだに内在している発達の可能性あるいは可能態」といえます。極めて物質的な存在なのです。それを宙に浮いた不思議な存在として考えてはいけなく考えています。

「生命（いのち）の安全教育」という事業方針に対して、私たちは「からだの権利教育入門」というかたちで対案（浅井・良編 2022）を提起しています。つまり、生命という教科、「道徳」に限りなく集約されるような、そういう用語を定義もないのに使うことが何を意味しているのかと。英霊で祭られた人たちは、靖国へ行くと言って、そこに靈魂があるように教え込むのか。あるいは、統一協会のように死んでもまた霊界があるように導く問題もあります。そういうことにつながっているような、命という極めて多義的であいまいな用語・概念をきちんと科学的に考えなければいけないのではないのでしょうか。そして、それを本当にそれぞれの実生活で意味のあるものにしていかなくてはいけないのではないかというのが、私の問題意識です。

コミ福が「いのち」を使っているのが駄目だと言っているのではなくて、いま、私たちが「いのち」をめぐる何が問われているかということ議論しないといけないのではないかなというのが、私の問題意識です。

**跡部** 浅井先生、ありがとうございます。先生の定義をさらに掘り下げていただいたところですが、鈴木弥生先生、あとでさらに議論いたしますので、一旦、そこは踏まえずに率直に「いのち」に関してのお考えを教えてくださいと思います。

**鈴木** 私が考える「いのちの尊厳」とは、「いのちの尊厳」が踏みにじられている現状に目を向けること、まずもって、容易には目を向けられない、誰もが目を背けてしまう、なおざりにされがちな、あるいは、気がつきにくい問題に目を向けることではないかと考えています。西川潤がよく言っていたことですが、途上国の貧困層は向こうから来られないので、自分から出向く（西川 1974, 1976, 1977, [1983]1994, 2000 ほか）。私はそういう意味で第三世界を歩いてきました。そして、

いま、紛争というものがアメリカの大きな力のもとに非常に複雑化している。浅井先生の方が詳しいですけども。

さきほど、跡部先生が受講生（参加者）のコメントについて言及してくださって、学生はいいこと言いますよね。スライドには、受講生（参加者）のコメントをそのまま引用したんですけども、話を聞いたその場で、素直に出た言葉ですよ。

もし、自分が現地の人だったらどのような行動をするのかについてディスカッションした際、自分を守ることによって精いっぱい、まわりの人に気を配れるほどの余裕があるのだろうかと思絶望的になった。

このコメントは、周囲への配慮を感じさせますよね。コミュニティ福祉学部の学生は、周囲への配慮が行き届いているのだと思います。この学生は、次のようにも伝えられています。

そんな状況下で長い期間過ごしている人々のことを思うと心苦しくなったし、ガムラさんの話し方を見るとさらに心が打たれた。さまざまな方と話す機会は貴重なので感謝を伝えたいです。

さきほどは、時間の関係から触れませんでしたでしたが、私は日本のメディアが伝えるものは断片的であり、ほんの一部だと思っているのです。私自身が新聞に掲載されたときの経験から。だからこそ、私も含めて戦争という体験がないので、当事者の声を通して聞くということを大切にしています。こういう意図が影響しているのか否かは分かりませんが、「シリアやパレスチナ、イスラエルの問題にも焦点をおいて、それぞれ当事者の声を通して聞くことができたことは非常に貴重であった」という学生の声もありました。

きょうは、グローバルな視点という題をいただいたのですが、私は、グローバルな視点だけでは不十分であって、当事者の視点、それから文化の多様性が必要だと思えます。浅井先生がスキップされたニュージーランドの内閣のスライドは非常に重要なので、のちほど、もう少し浅井先生のご意見をお伺いしたいです。

それゆえに、2つの授業名「Local People's Perspectives in International Culture and Social Problems」、および、「Local People's Perspectives in Social Development」の「Local People's」というところにもこだわりがあるのです。グローバルな視点だけではなくて、当事者から学ぶことも非常に大切になると考えております。以上で答えになっているでしょうか。沼澤先生の時間がなくなるので、バトンタッチします。ありがとうございます。

沼澤 沼澤です。「いのち」に関わることで、私が話せる範囲でお話しさせていただきます。今の世の中、明日がどうなるか分からない状況が、いま、起こっていると思います。異常気象の問題や新型コロナウイルス感染症もそうですし、隣国への侵攻でいつ戦争が起こるか分からない状況とか、隣の国からミサイルが飛んでくるかもしれないこと、そんな状況が続いていると、人間はやはり不安になってしまいます。不安の時代が、いま、訪れているのではないかと思います。

そのときに、不安になると家に閉じこもってしまっても何もしない。何もしないでいると健康状態も失われてしまう。そんな状態で、豊かな人生が送れるかどうかということは、疑問です。

スポーツ系の学部は、科学や健康を掲げた学部名にした大学がいくつかあるのですが、なぜ、われわれが「ウエルネス」を学部の冠にしたのかというと、健康観を、より大きく、いのちの問題として捉え、「よりよく生きる生き方」を追求していこうという想いがあったからです。ですので、明日、どうなるか分からない状況を消極的に考えると何もできないのですけれども、何もできなかつたら豊かな人生は送れませんので、スポーツウエルネス学部は、豊かな人生を追求していくためにはどうすればいいかに焦点を置いて教育をしていきたいと考えています。

跡部 ありがとうございます。豊かな人生を送るといふところでの健康ですとかスポーツが、明日どうなるか分からない時代だからこそ、何かアクションを起こすうえでも、必要になってくるということですね。

明日どうなるか分からない時代に引き付けると、今回、ウクライナ情勢もあったので、戦争をシンポジウムのひとつのトピックとして取り上げさせていただいたわけなのですが、鈴木弥生先生のおっしゃるように、いくら他国の状況を知ったとしても、それが自分と関係ないどこかの人の話ということでは、全然アクションを起こそうとかそういうことにはならなくて。ただ単にグローバルな視点があればいいというわけではなく、ただ単に知識として知っている必要があるというわけではなくて、当事者の視点に立てることが必要である。それによって、その問題は自分にも関係があるのだと認識できる。そして、多様性の視点を持つと、自分が当たり前で過ごしていることが、相手にとっては、全然当たり前じゃないことがみえてくる。この事実に触れることによって、実は自分自身が足元で何かを踏みつけていたことに気づく。ひととの出会いや経験、知識という、新しい眼鏡をかけることによって、実は、今までは見えていなかったものを踏みつけていることが分かるという意味において、学びであったり、学問であったり、経験や知識が「いのちの尊厳」のために、必要であるというお話だったと思います。

この後は、集団にもさまざまなカタチがあるというところを、深めていければ

と思います。鈴木弥生先生からは、浅井先生がお話しできなかったニュージーランドの内閣のことを話してほしいというリクエストがありました。湯澤先生からは、集団的な力が必要というところで、人間の間らしさを阻害する集団とは逆の集団のかたち、すなわち、「いのちの尊厳」を大事にしていくために連帯していくというお話がありました。まず浅井先生、鈴木弥生先生からリクエストのありましたニュージーランドの内閣について、お話しいただくことはできますでしょうか。

**浅井** ニュージーランドの内閣の閣僚の写真でわかることは、それぞれの民族や性的マイノリティを大事にして構成されていることです。女性が40%、マオリ族の閣僚が25%、パシフィカ（太平洋上の島々にルーツをもつ人）、さらにLGBTQ+を公言している人たち、そういう人たちがあの内閣では統合されています。そこが私は、素晴らしいと思うところです。アーダーン首相<sup>③</sup>は、非常に若い方です。こういう若い方が支えられ、リーダーに推し出され、同時にLGBTQ+、マオリ族の人たち等も含めて、社会的なマイノリティが内閣を構成している。それに比して、日本の内閣は圧倒的に年配の男性が多い。

私はニュージーランドのこの内閣を見て一番、日本との違いを感じたのは、壇上で写真に写っている日本の閣僚の笑顔のなさです。政治家が本当に国民に対して安心しなさいというメッセージとしても、日本の内閣のあの笑顔のなさというのは最悪だなど、私は思わざるを得ないんです。

私たち大学教員である人たちは、リスペクトされやすい立場にいるように勘違いすることもあると思うのです。これはイギリスのスキデルスキーという親子が、『じゅうぶん豊かで、貧しい社会——理念なき資本主義の末路』のなかでこう言っています。

他人を尊敬するとは、その人の意見や姿勢を重んじ、無視したり粗略に扱ったりすべきではないとし、それを何らかの形で表明することであり、尊敬が意味するのは他人の視点を認め、重んじることである

(Skidelsky, R & Skidelsky, E 2013=2022: 268)

これは、戦争にもつながるし、集団の中でのわれわれの関係にもつながるし。パートナー関係はもちろんのことです。私にとってのコミ福の原風景は、「現風景」であり続けてほしいと願っています。

私は児童福祉が専門なので、日本の国の子ども政策で、私が考えている子ども政策と、運動の中でつくりたいという子ども政策と決定的に違うのは何かといたら、子どもへのリスペクトを政策の土台に位置づけているかどうかという点で

す。教育というのは押し付ける強制でいいんだと、こういうふうを考えている教育政策に、子どもへのリスペクトが本当にあるかどうかは問われていると思います。コミュニティ福祉学部の先生方は、大学生に対してのリスペクトを持って関わっておられると思います。新たな学部でも、25年、四半世紀を超えた学部でも、この問題を考えてみてもいいのではないかと私は思います。弥生先生、ありがとうございました。

**鈴木** こちらこそ、ありがとうございます。

**跡部** ありがとうございます。理想的な集団の在り方というか、「いのちの尊厳」を大事にしていく集団の在り方というところでお話しいただいたかなと思います。笑顔のなさは、まさに、いかに人間のビビッドな感情を普段から大事にできているのかということにもつながっているのかなというふうに感じましたし、そういった感情につながっているからこそ、子どもたちの素直な感情の発動や、率直な意見に対してリスペクトしていけるのかなと、お話を伺って思ったところなんです。

それでは、フロアのみなさま、本当に率直なコメントを、特に卒業生のみなさま、学部生、大学院生のみなさま、生煮えでもいいのでコメントをいただけたらと思います。

すでにフロアから寄せていただいた質問にも答えていけたらと思います。浅井先生の「戦争によって福祉は『福死』となる」という言葉が、やはり参加者のみなさまには、印象的だったようでして、この言葉の意図と言いますか、なぜ、このように考えるようになったのかをもう少し知りたいというお話がありました。この福祉は「福死」になるという言葉にたどり着いた経緯などを教えていただけますでしょうか。

**浅井** はい。それは歴史を勉強すればそれが事実なのだということですね。北欧が、今は戦争に兵士をおくるようになりましてけども、北欧がなぜ福祉の先進国になったかという、ひとつの背景は、第1次大戦、第2次大戦で基本的に戦争に与しなかったというところが出発点であり、そこから福祉国家として発展してきたということがあると思います。

2022年の時点で日本は、戦前と今、ちょうど戦後が77年、両方がちょうど中間なのです。この77年、戦前の77年という時代に、いま、位置しているのですけれども、この戦争という問題をコミ福の中でやはり考えなければならないなと思うのは、スポーツウエルネス学部の理念「すべての人の生きる喜びのために」です。沼澤先生、この理念すごく、いいですね。それで、スポーツウエルネス学

部の理念を、私の問題意識でいうと、人々の歓びを奪っている人たち、奪っている仕組みがあることを、やはり、われわれは突き止めて、それに抗わなくてはならないと思うのです。

私は、コミ福でこう言ってもらいたいと思っているのではなくて、私の生き方は、抵抗権、抵抗する権利を自分自身も果たしていく態度が問われていると思っています。そして、歓びを奪っている人たち、奪っている仕組みを見抜いて、それに抗うことは、人権をどう尊重するかに結びついていくと思っています。そういう意味でも、人権というひとつの観点からすれば、よく使われる言葉である「公共の福祉」として、みんなが幸せになって、みんなが歓びを分かち合える。それが人権の全体像だと私は思っているところです。だから、スポーツウエルネス学部、フレイフレーとエールを送りたい気持ちでお聞きしていました。

**跡部** 浅井先生、ありがとうございます。みんなが歓びを分かち合えるというところで、歓びを分かち合える仕組みであったり、歓びを分かち合える人たちと、逆に、人から歓びを奪っていく仕組み・人たちというお話が、いま、出てきたのですけれども、ちょうどフロアから、次のようなオリンピックに関するコメントが出てきました。

最近、東京オリンピック・パラリンピックの金銭的な汚い部分が顕在化していますが、オリンピックを代理戦争として批判する立場の人々もいます。福祉の立場から期待される新しいスポーツ像と、スポーツと福祉というところでご意見を伺いたい。

オリンピックはすごく象徴的なことかと思うのですけれども、純粋にスポーツを楽しみたいという人々を駆り立てながら、利権が絡む中で、そして純粋にスポーツをしたいという人々を支援していくというところとは、また違うかたちにオリンピックのかたちが変わっていったり、オリンピックの規模が大きくなる中で当初の理念とは全然異なるものになってきたという経緯があるのかと思うのですけれども、福祉の立場からと言いますか。「すべての人の生きる歓びのために」というところで、どういうかたちでまとめるといいかなと、いま、考えながら話しているところではあるのですが、オリンピックということになるのか分からないのですけれども、純粋にスポーツをやりたい人たちが、「すべての人の生きる歓びのために」スポーツを活かすというところで、どんな実践があるのか。

あるいは、スポーツから離れても差し支えございませんので、「すべての人の生きる歓び」を教育の中で先生方がどのようにこれまで組み込んできたのかをお話しただけだと思います。

それでは、浅井先生から提起いただいた、歓びを分かち合うところと、歓びを奪うという視点から、教育実践や研究で考えていることをお聞かせいただければと思います。だいぶ浅井先生にお話しいただきましたので、湯澤先生、これまで伝えきれていなかったことも含めて、少し伺えますでしょうか。

湯澤 「パスもOK」ということですので、他の先生、先にお願ひします。

跡部 はい。提起がすごく大きすぎてすみません。

跡部 鈴木弥生先生、いまの質問は飛ばしていただいてもいいので、これまで話せなかったことですか、「すべての人の生きる歓びのために」というところで、何か教育実践の中で心がけていることがあったら教えていただけますでしょうか。

鈴木 はい。オリンピックの話は沼澤先生に残して、すべての人の歓びのために……。難しいですけども、何でしょう。バングラデシュで学んだことは「生を受けて、そのこと自体が素晴らしい」ということです。イスラムは、(大国が発信する情報によって) 誤解されることがありますが、私はイスラム教の信者ではないけれども、私がイスラム教の信者の方々から学んだことは、生、生命が非常に大切ということ。そのアラビア諸国が戦火に巻き込まれてるというのが非常に矛盾に満ちたことなのですね。生を受けて、ここに「いのち」があるということだけで素晴らしいですよ。

ただ、資本主義諸国になるといろいろな付加価値をつけたがる。成績がいいとか何々がいいとか。でも、本来、ひとは、やはり、いま、ここにあること自体が素晴らしいということが「いのちの尊厳」につながるのだと思います。「いのち」への感謝といいますか、ありきたりですけども。

ですから、その対極にある紛争や戦争はあってはならないことだし、さきほどの話題提供で、シリア出身のガムラの講演(講義)について話したときに、イスラエル出身のダニーさんとガムラのやりとりを紹介しました。イスラエルには徴兵制度が、今でもあるのですけれども、全員、いわゆる男性、女性にかかわらず徴兵されていて、それは拒否できないものだけでも、イスラエル出身のダニーさんが、今こうしてシリア出身のガムラに出会って、次のようにおっしゃる。

敵と教えこまれていた周辺国に、まさか、こんなに素敵な人がいるなんて想像もしていませんでした！ 18歳のときにあなたを知っていたら、私は徴役を拒否していた。



それも命がけで拒否するという意味ですよ。ダニーさんはお世辞で言う方ではないので。そうすると、人と人というのは、さっき跡部先生もおっしゃっていたように、「自分と関係ない国のことではないんだ」と。自分の友人がいるということになれば、やはり、銃は向けられないし、他人事ではなくなる。だから、戦いで交わることよりも喜びを分かち合いたいということになるのではないかなと思います。

**跡部** 自分と関係ない国のことではない、自分の友人がいるということになれば、他人事ではなくなるし、戦いで交わることよりも、喜びを分かち合いたいということになるということですね。ありがとうございます。

それでは、沼澤先生、オリンピックのことは、全然避けていただいても差し支えございませんので、スポーツですべての人の喜びを分かち合うというところで、これまでの経験からのお考えをお聞かせくださいますでしょうか。

**沼澤** はい。東京2020オリンピック・パラリンピックに関して、本当に残念だったことは観客を入れられなかったことなのですけども、今回のことでスポーツのというか、オリンピックの悪いところがたくさん出てきました。これは負の遺産というか、レガシイになると思います。悪いものを全部出せたという意味では、意味はあったかなとは思いますが。

一方、スポーツそのものの自己実現をすとか、夢をかなえとかということと、このオリンピックのレガシイはまた別な話であって、そのこととは少し切り離して考えなければいけないかなとは思っております。ただ、スポーツの魅力が大きいゆえに、いろんな利権がはたらくということもあるのかなと思います。

ここまでは感想で、「すべての人の生きる喜びのために」に関してコメントするならば、なぜスポーツウエルネス学部が、こういう学部の理念にしたのかというと、「すべての人」というのはスポーツでいう、平等性と言いましょか、「いろんな人たちのスポーツがある」「いろんな人たちの生き方がある」というところに焦点を置いていこうとした時に、特に「喜びのために」ということを強調しないと、スポーツやウエルネスのいいところが出てこないのではないかと考えて、スポーツウエルネス学部の理念「すべての人の生きる喜びのために」をつくらせていただきました。

この理念の基盤というか、ベーシックなところにあるのは、スポーツパーソンシップであり、スポーツは相手がなければ成り立たないので、相手をリスペクトするスポーツパーソンシップというところがあって初めて、「すべての人の喜び」であると思います。ですので、パフォーマンスが良いとか悪いとかは関係ない。アスリートスポーツもそうだし、生きていくために楽しんで体を動かすというこ

とも含めた理念になっています。

**跡部** ありがとうございます。スポーツそのものが、相手があって初めてできる、相手をリスペクトするスポーツパーソンシップに基づいているという原点に戻り、「歓び」を起点に始めていくというお話だったかなと思います。

東京オリンピックについては、みなさまそれぞれに思うところがあるみたいでして、フロアからは、「東京オリンピックでは選手の活躍の裏で、野宿者が排除され、新型コロナで亡くなった方もいた」というコメントが寄せられています。このコメントを踏まえると、コミュニティ福祉学部だからこそ扱えるさまざまな問題を提起したのが東京2020オリンピック・パラリンピックであり、沼澤先生が課題をすべて出したということをおっしゃっていましたが、いまのコミ福、スポーツウエルネス学科があるコミ福だからこそ、東京2020オリンピック・パラリンピックを考えられることがあるということですね。

さきほど、浅井先生が歴史から学んでいくということもおっしゃっていましたが、今後、学部は別にはなるのですが、コミュニティ福祉学部の一つの歴史の在り方として、スポーツも含めたかたちで「いのちの尊厳」を考えられてきたということ、そして、「いのちの尊厳」を考える上でスポーツは非常にいろんなものを提起しているのだなど、フロアのみなさまのコメントも拝見しながら感じたところでございます。

すみません。私の時間配分が悪くて、残り4分となってきています。最後に質問も出しつつ、先生方には、これまでに、言いそびれたことも話していただけたらと思っています。

最後の質問は、「今後、コミュニティ福祉学部がどのような学びを蓄積し、何をテーマとして歩んでいくとよいとお考えでしょうか」というフロアからの質問です。湯澤先生が話しそびれた、今後の学部を考える上での材料というところにもつながってくるかと思えますし、浅井先生、移動がございますので、先に話していただければと思いますので、今後のコミ福に期待すること、そして、沼澤先生には、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科を卒業していく在学生に向けてのメッセージをお願いいたします。まずは、浅井先生お願いいたします。

**浅井** 次の予定があって、申し訳ありませんが退席させていただきます。沼澤先生をはじめとしたご尽力のなかで新学部が創設されることを心から喜んでおります。真の市民スポーツ、そして、その文化を育てていただきたいということが、私の一番、スポーツウエルネス学科に希望するところです。

そして、これからの生き方としては、やっぱり私は、どんなところに位置しようと、少数派になることを恐れずに、必要なことを言い続ける勇気が、私たちに

は常に、特に研究者には求められていると思います。現職の方々と一緒に、退職した人間も微力ながら、この社会を見つめながら必要な発信を続けていきたいと思っております。

**跡部** ありがとうございます。それでは記念撮影をしてから終わりにしていきたいと思うのですが、フロアからご提案がありまして、ニュージーランドの内閣のように、みんなで笑顔で写真を撮れないかということです。登壇者だけではなくフロアも含めて、平場な感じであることが「いのちの尊厳」にもつながっていくかなと思います。

そもそも、カメラオフで参加できると周知をしていたので、その方が参加のハードルが低いかなと思ったので、きょう、カメラオンの準備ができてない方も多いと思うのですが、もしカメラオンにできる方がいらっしゃいましたらカメラオンにさせていただいて、オフの方はオフのまま差し支えございません。では、ニュージーランドの内閣のように笑顔で撮っていただきたいと思います。

それではみなさま、笑顔でご準備をお願いいたします。

ありがとうございます。すみません。私のタイムスケジュールが悪く、浅井先生、本日は本当にありがとうございます。

**浅井** 楽しく一緒に同じ時間を過ごせました。本当にありがとうございました。

**跡部** ありがとうございます。それでは、順番に迷ってはいるんですけども。

**湯澤** では、ここで発言させていただいてよろしいでしょうか。

**跡部** はい。お願いいたします。

**湯澤** みなさまにはレジユメで配布させていただいたのですが、これから福祉学科とコミュニティ政策学科の2学科に再編され、スポーツウエルネス学科は新学部になっていきます。この時期に、やはり、改めて、コミュニティ福祉とは、一体、何なのだという点を議論していければと考えています。スライドに示したのは一例として、坂田周一先生のご提起なさっている定義です。

コミュニティ福祉とは、人権保障のために国家社会がなす諸施策を前提とし、それらとともに、コミュニティの持つ力を活かし、かつ、コミュニティにおける諸活動に積極的に関わりをもち、それらの諸活動によって形成されるシステムを通じて実現される福祉の状態である  
(坂田 2013)

それぞれの持ち場で、それぞれの思いや専門性を踏まえて、様々な意見を活かしながら、ふんだんに議論をしていければと思います。

また、図16も坂田先生の定義に基づいてまとめたものですが、コミュニティ政策学科と福祉学科の2学科の相乗効果で、福祉社会、そして、市民社会のありようを、みんなでよりよくしていくという点は、ますます工夫して創り上げていきたいと思います。

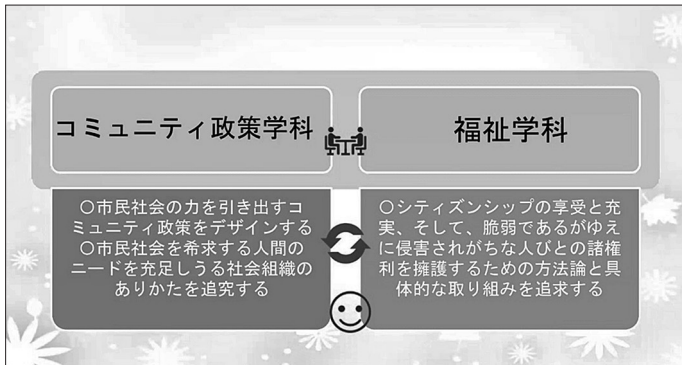


図16 坂田周一先生の定義に基づく2学科体制のイメージ

出典：当日の配布資料・投影資料

このスライド(図17)は、さきほど映したのですが、ソーシャルワークのグローバル定義の詳細は、後で配布資料をご覧ください。

### ソーシャルワーク専門職のグローバル定義

- \* ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。
- \* 社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。
- \* ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける

図17 ソーシャルワーク専門職のグローバル定義

出典：当日の配布資料・投影資料

日本ソーシャルワーカー連盟ホームページより一部引用

[https://jfsw.org/definition/global\\_definition/](https://jfsw.org/definition/global_definition/) (2023年8月30日最終閲覧)

福祉というと、「介護」というのが社会的なイメージなのですが、そもそもソーシャルワークが持っている幅広く奥深い力を発信し、現実的な問題に対処し得るものであるという認識を広げながら、新しいコミュニティ福祉学部でも実践していきたいと思っています。

湯澤 最後に、これは、私自身への戒めというか、大学人であることの上にあぐらをかかないよう自分なりの大学への取り組みとして、何ができるかを考えたこととお話します。やはり、大学という拠点、学術コミュニティの拠点は、最大限に活かしていかなければならないと思っています。どのように活かしているのか、限られた時間ではありますが、私のこれまでの経験での学術コミュニティの拠点の例をいくつか紹介したいと思います。

1つ目が、跡部先生も関わってくださっている立教大学ジェンダーフォーラムです。これは、1998年に職員と教員が一緒につくり出した拠点なのですね。スライドを見ていただくと、総長室をはじめ、様々な立場の職員や教員が、学部を超えて参画してきております（図18、立教大学ジェンダーフォーラム1999）。

ジェンダーフォーラムのような取り組みは、全学で取り組み社会に発信することができる意義ある活動のひとつです。2つ目に、東日本大震災復興支援プロジェクトですね。本学部の教員であられた森本佳樹先生が、東日本大震災が発生したときにいち早く会議資料を出して、そして、全学にアピール文も出して組織していった活動です。このプロジェクトも、学生と一緒に取り組むことを重視し、学生とともに継続的に最低でも10年間は続けようと活動してきました。やはり、「1人の100歩より100人の1歩」です。詳細は、プロジェクトで発刊した『復興支援ってなんだろう？人とコミュニティによりそった5年間』（本の泉社）をご覧ください。このほかにも、大学だからこその多様な活動、社会への発信を今後も発展させていきたいと思っています。

ジェンダーフォーラム運営委員会	
2000年3月現在	
■所長	庄司 洋子（社会学部）
■運営委員	井上 雅雄（経済学部） 加藤 敏子（就職部） 北山 晴一（文学部） 近藤 弘（文学部） 前田 勇（観光学部） 松井 明子（学生部） 松島 理恵（総長室企画課） 森山 理子（ミッチェル館同窓会） 野澤 正充（法学部） 岡田 慶子（総長室秘書課） 小野 善藤（新座事務部） 瀬川 洋子（ミッチェル館同窓会） 安田 雪（社会学部） 湯澤 直美（コミュニティ福祉学部）
※アルファベット順	
■事務局	小野美智代

図18 立教大学ジェンダーフォーラムの構成（2000年3月現在）

出典：当日の配布資料・投影資料

湯澤 そして、さきほど、「みんなが喜びを分かち合える社会へ」という話があったのですが、実は、コミュニティ福祉学部の中でも、そのことを重視して取り組んできたことがあります。そのひとつが、春学期ガイダンス期間中に新入生の歓迎会として開催するウェルカムアワーです。ウェルカムアワーでは、教員紹介と並行して、事務部、図書館、メディアセンター、キャリアセンター、保健室、食堂、警備といった様々な部署の方々に会場にお越しただいて、新入生に紹介する場を設けてきました。キャンパスを構成する多様なアクターを紹介していたんですね。

いま、ふりかえってみても、この取り組みは、いろんな意味があると思っています。「キャンパスにはいろんな職種の方々がいます」というご紹介だけではなく、「紹介」という出会いを通して、私たちが日常のなかでどのようなまなざしで、そのような方々と向き合っているのか、自分自身が問われているということを意識化することが重要なのだと思うのです。たとえば、清掃業務を担ってくださっている方々がお掃除をされていて当然、というまなざしに陥ってしまえば、日常の人間関係がモノ化されていってしまったということになります。日常とは、そのような「モノ化の威力」があるのです。ウェルカムアワーでキャンパスを構成する多様なアクターが一堂に会することは、そういった威力に対するアンチテーゼの取り組みでもあると思います。同時に、あらゆる職業へのリスペクト、あらゆる他者へのリスペクトということも、本当に、私たちが意識的に取り入れていかなければいけないのではないかということですね。

あともう1つは、この取り組みが持っている意味として、学生さんや私たち教員は、他者を見ているようで、実は「他者に見られているのだ」という、そこを突き付けた取り組みなのだと思います。つまり、もしかしたら、お掃除をなさっている方や、キャンパスの中でいろんなところで働いてくださっている方の中で、「大学生っていいな」「大学に進学したかったな」と思ってらっしゃる方もいらっしゃるかもしれない。そういう身近な他者への想像力をどう鍛えられるか、ということが重要なのだと思います。

湯澤 最後に、ユネスコの学習権宣言を本日、パワーポイントに入れてきました。ユネスコの学習権は、「深く考える権利、想像し、創造する権利、そして、自分自身の世界を読み取って歴史をつづる権利」として学びを定義しています。さらに、さきほど述べた集団的力が、個人的な力量とともに大事であり、私たちには集団的力を発達させていく重要な権利があるということですね。

つまり、社会変革の中核に、学ぶということがあるのですよね。私は、大学で学べるという権利の上にあぐらをかかず、この学習権を意識して、学生さんとともに切磋琢磨しながら、これからも歩いていきたいと思います。本日はどうもあ

りがとうございました。

**跡部** ありがとうございます。湯澤先生にここまでを早い段階でご報告いただければ、もっと議論を深められたなという、ちょっと後悔の念もあるのですが、学部理念をさらに発展させて行動していくためのいくつかの未来像を示してくださり、ありがとうございます。それでは鈴木弥生先生、これからのコミ福の展望といえますか、学生さんへのメッセージでもいいですので、今後のことについて最後に一言いただけますでしょうか。

**鈴木** そうなのですね。終了時間かと思っていたのですが1分だけ。さきほど、浅井先生がこんな内閣をつくりたいということをおっしゃっていたので、私もこんな教室をつくりたいという話をしたいと思います。

私がこんな教室をつくりたいと思って始めたのが、Nativeと英語で学ぶ授業なのですね。ですから、どちらかという英語が流暢に話せるようになるというよりも、この絵にみられるように、世界各国・地域から来ている方々のみならず、しょうがいと書いていいんでしょうか。しょうがいのあるなしにかかわらず、車いすを使用している方々も一緒にいて、年齢に関係なくということです。この絵の中にアラブ系の少女とユダヤ系の少年、アフリカ系の子どもたちとか、ほかにもたくさんの子どもたちがいるように (Penfold and Kaufman 2018)、出身国や地域、宗教の違い等に関係なくさまざまな背景を持っている方が集う教室 (場所) をつくれたらいいなと考えています。

日本では、同じ年齢、同じような趣味の人同士でしか集まらなかったり、車いすの方はあまり見かけなかったりといったことが多いかなと感じているので。最近の英語による授業では、この写真にもあるように、出身国や地域、年齢の違いや文化の多様性がみられるようになっていきます。

さきほど、歓びを分かち合うという観点から、バングラデシュから学んだこととして、「ひとは、いま、ここにあることが素晴らしい、かけがえのない存在」というお話をしましたが、やはり、この瞬間、生きていることを、ここで共有できていること自体が、素晴らしいことなのじゃないかなと思っています。

私の今後のコミュニティ福祉学部の展望としては、本日は、グローバルな視点で話すようにとテーマをいただきまして、立教大学の国際化推進とも合致しておりますので感謝しております。そのうえで、繰り返しになりますが、当事者の視点、そして文化の多様性、障がいのあるなしも含めて、もちろん皮膚の色にかかわらずいろいろな方々に目を向けていく。日本は足元を見ればいろいろなところに、さまざまな国と地域にルーツを持つ方がいらっしゃるの、そのかたがたを含めてのコミ福であるといいなと思っています。これまで同様に、そしてもう少

しずつ広げてということです。

それから、「いのちの尊厳」というのは素晴らしい理念だなと、本日、再認識いたしました。創設者の先生方にも感謝申し上げます。そして跡部先生、本日はありがとうございました。

**跡部** ありがとうございました。まさに、コミ福の創設時から浅井先生が感じていた多様性というところ。ビジュアル的にも多様なところを実現していこうという弥生先生のお話だったかなと思います。それでは沼澤先生、コミュニティ福祉学部のみなさまに向けてのメッセージをお願いいたします。

**沼澤** はい。最後にスライドを出させていただきます。メッセージということで、いまの在学生の学生は、入学時の卒業、つまり、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の卒業になりますので、教員がスポーツウエルネス学部の所属になりましても、もっと言えば新しく来る先生も含めて、卒業までみなさんを支援していきますので安心してください、というのが1つ目のメッセージです。

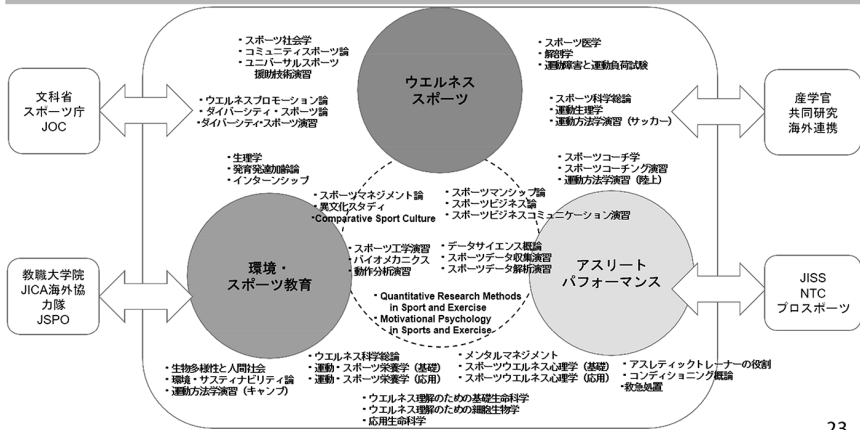
それから、卒業生の方の中には、もしかしたら福祉マインドを持ったスポーツウエルネスだったからよかったんじゃないかと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、図19に出ていますパフォーマンス領域のアスレチックトレーナー養成をしようとすると、科目を増やさなければならず、科目を増やすためには学生数を増やす必要があり、学部じゃないとできないというところがあったのです。

**沼澤** それから、日本のスポーツや健康教育をリードするときには、やはりスケールメリットが学科では少し薄くて、学部にしたということがあって、学部として独立することになりました。けれども、さきほども言いましたように、「いのちの尊厳のために」ということを基盤にして、「すべての人の生きる喜びのために」という考え方のスポーツウエルネスに変えていきますので、今後とも注目していただければと思っています。

**跡部** ありがとうございました。「いのちの尊厳」「すべての人の生きる喜びのために」というところを、さらに発展させていくためのアスリートの養成強化というところでの学部としての独立というお話と、現役のみなさまはコミュニティ福祉学部で最後まで面倒見ますよという温かいメッセージをいただきました。ありがとうございました。

**跡部** それでは、シンポジウム「コミ福25周年をふりかえる」はここまでにい





## スポーツウエルネス学部のカリキュラム

図 19 スポーツウエルネス学部のカリキュラム

出典：当日の投影資料

たしまして、このシンポジウムがまなびあい最後のプログラムにもなってきますので、お時間を超過している中、大変恐縮ですが、今年度のまなびあいを締めくくっていききたいと思います。事務局長の空閑先生、もし話せそうでしたら一言いただけますでしょうか。

**空閑** はい。ありがとうございます。みなさんのお話を聞いているといろんな考えが浮かんできました。特に、最後に沼澤先生がおっしゃったことは、とても大事だなと思っています。

いま、私がスポーツとコミュニティ、福祉ということで考えたいのは、サッカーワールドカップカタール大会の日本対ドイツ戦と、箱根駅伝です。ドイツ戦がなんであんなに盛り上がるのか。箱根駅伝がなんでこんなに盛り上がるのかといったら、ボーダーがあるからです。境界線があるから。すなわち、立教だから盛り上がり、日本だから盛り上がる。この境界線というのは、浅井先生がポール・ナースの議論を紹介しておっしゃったように、いのちの根源につながってきます。生きてるといのは、われわれと外を分け、境界線を持つところから始まってくるというご指摘ですね。スポーツが盛り上がるのは、この境界線をものすごく意識させるから。つまり、理屈抜きで生きているということを実感させるものだから

です。それゆえに、政治にも利用されるのです。

この点を踏まえた上で、スポーツウエルネス学部の理念「すべての人の喜びのために」という方向にスポーツが向かったときにどうなるかを考えてみます。いま、私の卒論生でアスリートのセカンドキャリアについて研究している学生がいるのですけれども、その学生に教えてもらったことですが、アスリートがセカンドキャリアとして少年野球でコーチをすると、子どもたちの目が輝くというのですよね。

スポーツは、レベルに関係なく、自分のパフォーマンスを上げたいという根源的なところに触れるので、それに応えてくれる人が輝いて見えるわけです。あのようになりたい、ということです。だから、自分のパフォーマンスを上げることに對して、具体的なアドバイスをできる立場の人がコミュニティにいるというのは、すごいことです。浅井先生が最後におっしゃったように、市民スポーツを盛り上げていく。それを一つの柱にしていくというのは、私は新しい学びの拠点であるスポーツウエルネス学部の重要な点になるんじゃないかなと思いました。

翻って、それは、やっぱり、コミュニティの起点にもなるし、コミュニティ福祉という意味でもすごく大きな可能性があるのです。スポーツウエルネス学部になっていろいろなと一緒にやれたらいいなと思いました。ありがとうございます。

**跡部** ありがとうございます。湯澤先生も委員長として一言ございましたらお願いいたします。

**湯澤** はい。最後ぐらいは早口ではなく話しますね。ここまで運営委員会で企画、準備を進めてくださいました空閑先生はじめとして、みなさま、本当にありがとうございました。

さきほど、画面に顔をみなさん出していただいたときに、懐かしい顔がいっぱいあると思って、直接お会いしてお話しできないのがすごく残念ですが、ぜひ来年こそは対面で会えたら本当にうれしく思います。何人も卒業生の顔をキャッチできました。本当にありがとうございます。

きょう、リスペクトということが、たくさん出てきたキーワードであったと思います。浅井先生が子どもたちのことをリスペクトしているのかとおっしゃいましたけれど、やはり私たちに問われているのは、学生一人一人をどうリスペクトできているのかということ。それから、教員相互でリスペクトができているのかということなんだろうと思うんですね。

そう思うときに、一回生、1回きりのこの命をみんな生きていて、その命の時間をこのキャンパスの場で共有できている。それは、やっぱり、奇跡的なことなのだというふうに思います。こうして出会えたみなさんに本当に心から感謝を申

上げたいと思います。

これから新学部、学部再編となっていくかもしれませんが、また、ますます相乗的な効果でこのキャンパスから新たな連帯、絆をつくっていききたいと思います。本当に本日はどうもありがとうございました。

**跡部** それでは、お時間を超過してしまいましたが、最後まで残ってくださったみなさま、ありがとうございました。来年は対面でもお目にかかることをお祈りしながら、また、まなびあいを続けていければと思います。それでは、今年度、ご参加いただきありがとうございました。

## 注

- (1) 鈴木 (2016)、Suzuki et al. (2020)、Ghamra and Suzuki (2021) のほか、鈴木弥生「こんな研究をして世界を変えよう～大学の研究室を訪問してみた：ニューヨークに住むバングラデシュ移民の動向」『みらいぶっく 学問・大学なび』(内閣府・総合科学技術イノベーション会議のエビデンス事業の一環で、高校生向けに発信中) (<https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/k0482/>) 最終アクセス、2023年3月20日、河合塾「探究!につながるテーマ」『みらいぶっく 学問・大学なび』(<https://miraibook.jp/quest/detail/28>) 最終アクセス、2023年3月20日。
- (2) 1999年度以降の調査は、文部科学省と日本学術振興会の科研費助成によって実施している。最新のテーマは「ニューヨーク市の移民労働者：新型コロナウイルス感染の影響についての国際共同研究」研究代表者・鈴木弥生 (国際共同研究強化 (B) 2022年10月～2028年3月予定)。
- (3) 2023年1月19日、アーダーン首相が辞任表明しました。「政治家も人間だ」、「満タン状態で、かつ予期しない課題に備えて余力がある状態ではない限り、国を率いるしごとにはできないし、するべきでもない」……実に誠実で潔い政治家であり、自立した個人だと思いました。誰とは言いませんが日本の政治家の多くの方々に、アーダーン元首相の爪の垢を煎じて飲ませてあげたいです!

## 引用・参考文献

浅井春夫 (2016) 『戦争をする国・しない国』 新日本出版社。

———. 川満彰編 (2020) 『戦争孤児たちの戦後史1』 吉川弘文館。

———. 水野喜代志編 (2021) 『戦争孤児たちの戦後史3』 吉川弘文館。

———. 川満彰・平井美津子・本庄豊・水野喜代志編 (2022) 『事典・太平洋戦争と子どもたち』 吉川弘文館。

———. 長香織編 (2022) 『からだの権利教育入門 幼児・学童編 —— 生命の安全教育の課題を踏

- まえて』子どもの未来社.
- 安積遊歩 (2009)「障害を持つ当事者教員は学生にどのように関わったか」福山清蔵・尾崎新編『生のリアリティーと福祉教育』誠信書房：pp.56-74.
- ダニー・ネフセタイ (2016)『国のために死ぬのはしばらしい?』高文研.
- Ghamra, Rifai and Suzuki, Yayoi (2021) “Syria, what happened and why it happened: Once-beautiful ancient cities that were my homeland”, *The Community & Human Services Society “Manabiai”* (立教大学コミュニティ福祉学部『まなびあい』) 14 : pp.184-194.
- 早坂泰次郎 (1971)「立教大学大学院応用社会学研究科社会福祉コース (大学院紹介)」『社会福祉学』11 : pp.128-131.
- 平井美津子・本庄豊編 (2020)『戦争孤児たちの戦後史2』吉川弘文館.
- 西川潤 (1974)『第三世界と日本』潮出版社.
- (1976)『多国籍企業と第三世界』毎日新聞社.
- (1977)『第三世界の構造と動態』中央公論社.
- ([1983]1994)『貧困 21世紀の地球』岩波ブックレット.
- (2000)『人間のための経済学——開発と貧困を考える』岩波書店.
- Nurse, Paul. 2020. *What is Life?* David Fickling Books. (= 2021 竹内薫訳『生命とは何か——WHAT IS LIFE?』ダイヤモンド社).
- 大蔵省昭和財政史編集室編 (1955)『臨時軍事費』東洋経済新報社.
- Penfold, Alexandra and Kaufman, Suzanne (2018) *All are Welcome*, Alfred K. Knopf: New York.
- 立教大学ジェンダーフォーラム (1999)「ジェンダーフォーラム運営委員会」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』1 : p.202.
- 立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室 (2016)『復興支援ってなんだろう? 人とコミュニティによりそった5年間』本の泉社.
- 坂田周一監修, 浅井春夫・三本松政之・濁川孝志編 (2013)『新・コミュニティ福祉学入門』.
- 関正勝・福山清蔵・坂田周一・沼澤秀雄・三本松政之・鍛冶智子 (2018)「シンポジウム『コミュニティ福祉に今問われていること：過去を知り、未来を拓く』(第10回年次記念大会の報告)」立教大学コミュニティ福祉学会編『まなびあい』11 : pp.23-49.
- Skidelsky, Robert & Skidelsky, Edward. 2013. *How Much Is Enough?* Penguin UK. (= 2022. 村井章子訳『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』筑摩書房).
- Sassen, Saskia (2001) *The Global City, New York, London, Tokyo*, Second Edition, Princeton University Press: Princeton and Oxford.
- Sen, Amartya (2007) “The Global Economy” in Shaikh, Nermeen, *The Present As History: Critical Perspectives on Global Power*, Columbia University Press: New York, Part one, First, pp.1-16.
- 鈴木弥生 (2016)『バングラデシュ農村にみる外国援助と社会開発』日本評論社.
- Suzuki, Yayoi, Ritchie, Zane, and Yamazaki, Masaru (2020) “Local People’s Perspectives in

Social Development; An Analysis of the Contents of a Collaborative Learning Class”, *Bulletin of the College of Community and Human Services Rikkyo (St.Paul's) University*, 22: pp.53-84.